（資料）
中国語研究と認知言語学
文献資料翻訳

沈家煊《有界・無界》

秋　山　　淳*

翻訳にあたって

現在、筆頭執筆者の秋山は、福岡大学の間ふさ子、甲斐勝二、九州大学の東英寿、現代中国語講座所属の内堀由美子、村川京子らと共に中国語語法論文の読書会を行っている。今回そこで取り上げた論文は中国社会科学院語言研究所の沈家煊氏の＜“有界”与“无界”＞≪中国语文≫第 5 期（1995）と＜再谈“有界”与“无界”＞≪语言学论丛≫第 30 辑（2004）の二編である。この二編はどちらも人の言語能力は人間の一般的な認知能力の一部であるという「認知言語学」の考えに基づき、「有界」と「非有界」という対立した概念が中国語の名詞、動詞、形容詞といった品詞にどのように反映されているかを明らかにしたものである。この論文の最初に出てくるのが、数量詞の語法構造に対する制約作用である。この節を翻訳していて、先ず頭に浮かぶのは“了”の用法に関する教学である。ちなみに、今手元にある教科書では、動詞のすぐ後に現れる動態助詞とか時態助詞の“了”の用法に関する説明は次のように書いてある。(1)

（1）時態助詞“了 le”は、動詞の後に置き「～し終えた」という、動作、行為の完了、完成を表す

* 福岡大学非常勤講師（2009 年度）
翻訳協力者　間　ふさ子―福岡大学人文学部准教授
東　　英寿―九州大学教授
甲斐　勝二―福岡大学人文学部教授
内堀由美子―現代中国語講座
村川　京子―現代中国語講座

她喝了茶了（她喝茶了）

她喝了两杯茶。

※“她喝了茶”は言い切った表現にはならず、あとにそれから後ろの状況説明が続く。

她喝了茶，就走了。

日本語では「彼女はお茶を飲んだ」と言えてもそれをそのまま“她喝了茶”と翻訳してしまうと、中国語話者は何か中途半端な気持ちを持つという。そこで、沈家煊（1995）を読んでみると、“她喝了茶”が通常言えない理由が理解できる。沈氏によれば、修飾語がつかない裸の“茶”は「非有界」のモノであるが、“喝了”も単独の“喝”が非有界動作（開始点はあるが終了点はない）であることと相対して「有界動作」であるため、目的語名詞も「有界」でなければならないという。従って、目的語を“两杯茶”とすれば、目的語が有界化され、“吃了”と結びつくことができ、“她喝了两杯茶”は成立するのである。一方、“她喝了茶，就走了”は“(她）就走了”という事象を後続させることで、事象 1 ＋事象 2 の構造となり、事象間に有界線があると認識され、“她喝了茶，就走了”は成立するのである。

もう一つは結果キャンセルの問題である。先ず次の日本語と中国語の例を見てみよう。

（2）a.?太郎はドアを開けたが開かなかった。[2]

b.张三开门了，可是门没有开开。

（2a）の日本語の動詞「開ける」は結果キャンセルができず、「*開けたが開かなかった」は成立しない。一方（2b）の中国語は問題なく成立するようである。従って、(2b) を結果キャンセルできないようにするためには、たとえば、前節の“张三开门了”の動詞フレーズを動詞＋結果補語に換え、“张三推开门了，…”とすれば、“*张三推开门了，可是门没有开开”は成立しない。なぜなら、動詞＋結果補語の“推开”は内在終了点を実現したために、結果をキャンセルすると矛盾するからである。

以上、少ない例ではあるが、中国語の例を通し、人類の一般的な認知的メカニズムである「有界」と「非有界」の対立が語法にも反映されることを見てきた。この「有界」と「非有界」の対立は認知言語学の研究の一つである。本稿は沈家煊 1995＜“有界”与“无界”＞≪中国语文≫第 5 期、2004＜再谈“有界”与“无界”＞≪语言学论丛≫第 30 辑の翻訳である。訳者の我々はこの様な翻訳による紹介の作業をしながら、「有界」と「非有界」の対立の言語への影響を再確認し、読者と共に中国語語法の研究方法の視野

を更に広げていこうと考えている。翻訳は間、甲斐、東、内堀、村川の五人が下訳を作り六人で検討した後、秋山が再度まとめて注をつけたものである。本稿に不備があれば、責任はすべて私にあります。（文責　秋山）。

注

（1）斎藤匡史・何暁毅：田梅 2005『中国語スタンダード文型・表現編』白帝社

（2）沈力 2009「事象構造に関する日中対照研究の展望〜特に使役表現を中心に〜」中日理論言語研究会。

<「有界」と「非有界」>

要約：本稿は数量詞の語法構造に対する制約作用の原因の探究からとりかかり、人の認知上に形成された「有界」と「非有界」の対立が語法構造の中に具体的に反映することを論述する。[1] モノは空間に「有界」と「非有界」の対立があり、動作は時間に「有界」と「非有界」の対立があり、性状は程度あるいは量において「有界」と「非有界」の対立がある。[2] これらの平行する対立関係は、数量詞の制約作用と関係のある一連の語法現象を統一的に解釈するだけでなく、品詞理論に対しても非常に重要な意義がある。

1. 数量詞の語法構造に対する制約作用

数量詞の語法構造に対する制約作用については、陸倹明氏が《現代漢語中数量詞的作用》「現代漢語の数量詞の作用」で提出されたものである。[3] この種の制約作用は、陸氏の論文に従えば次の二点が表されている。一つは、ある統語的な組み合わせは、数量詞がなければ成立できないか不自由であること、もう一つは、ある統語的な組み合わせは数量詞を排除することである。

論述の都合上、いま陸氏の論文での主な事実をまとめると以下のようである：

（ｉ）ある統語的な組み合わせは、数量詞がなければ成立できない（*を用いて表示する）あるいは不自由なものである（(*)を用いて表示する)。

（1）二重目的語構造で、もし間接目的語が移動の着点場所を表示するか、あるいは「授受」の対象を表示するならば、直接目的語は数量詞を伴わねばならない。

*盛碗里鱼　　盛碗里两条鱼

「魚を二匹お椀に盛りつける」

(*) 送学校油画　　送学校一幅油画

「学校に一枚の油絵を贈る」

(送学校油画的是五五年的毕业生)

(「学校に油絵を贈ったのは 55 年の卒業生である」)

(2) 二重目的語構造で、もし直接目的語が結果目的語ならば、この結果目的語は数量詞を伴わねばならない。[4]

*(蚊子) 叮了小王大包　　叮了小王两个大包

「蚊が小王を刺してはれた」

*捂了孩子痱了　　捂了孩子一身痱了

「汗疹が子供の身体を覆った」

(3) 結果補語あるいは方向補語をもつ動補構造の後ろで、名詞性の目的語（動作主目的語を含む）が形成する動目構造では、目的語は数量詞を伴わねばならない。[5]

(*) 打破玻璃（打破玻璃的人找到了吗?）

(「ガラスをたたき壊した人は見つかりましたか」)

打破两块玻璃

「二つのガラスをたたき壊す」

(*) 飞进来苍蝇（飞进来苍蝇就打）

(「ハエが飛び込んでくるとすぐに叩く」)

飞进来一个苍蝇

「一匹のハエが飛び込んでくる」

(4)「動詞＋“了”＋名詞」のような動目構造は、目的語となる名詞は数量詞を伴わねばならない。

（*）吃了苹果（吃了苹果又吃梨）　吃了一个苹果
（「りんごを食べてまた梨を食べた」）　「りんごを１つ食べた」

（5）非述語形容詞（状態形容詞）が連体修飾語（“的”を用いない）となる修飾構造では、その中心語は必ず数量詞を伴わなければならない。[6]

*雪白衣服　雪白一件衣服
「真っ白な一着の服」
*热热儿茶　热热儿一碗茶
「熱い一杯のお茶」
*白花花胡子　白花花一大把胡子
「綿のような大きなひげ」
*干干净净鞋　干干净净一双鞋
「きれいな一足の靴」

（ⅱ）ある統語的な組み合わせは数量詞を排除する。

（6）行為を示す場所主語のフレーズ「主〔場所〕＋動詞＋“着”＋目的語」では、その目的語要素は数量詞を排除する。たとえば、“山上架着炮”「山に大砲を据え付けている/山に大砲が据え付けてある」が、もし“山上正在架炮”「山に大砲を据え付けている」を表す行為（“山上有炮”「山に大砲がある」の存在ではない）ならば、“炮”は数量詞を伴うことができない。

*山上架着两门炮　山上架着炮
「山に大砲を据え付けている」

実際には場所主語フレーズだけでなく、行為を表す「動詞＋“着”」の後ろの目的語は一般に全て数量詞を伴うことができない。たとえば：

*他正吃着三碗饭　他正吃着饭
「彼はちょうどご飯を食べている」
*他正写着五行字　他正写着字

「彼は字を書いている」

(7) 性質形容詞が連体修飾語（“的”を用いない)となる修飾構造では、その中心語も数量詞を伴うことはできない。これはちょうど（5）の状態形容詞が連体修飾語となる修飾構造が数量詞を伴わねばならない状況と相反する。(陸氏論文はこの点を触れていない)

*白一只孔雀	白孔雀 「白い孔雀」
*干净一件衣服	干净衣服 「きれいな服」

呂叔湘氏の《怎么学习语法》と石毓智（1992a）は、さらに数量詞を排除する二つの統語構造を指摘した。呂氏と石氏の論文をここで補足説明する。[7]

(8)「動詞重ね型＋名詞」の動目構造では、目的語は数量詞を伴うことができない。

(*) 今天要谈谈两个问题[1]	今天要谈谈问题 「今日は問題を話さねばならない」
*星期天在家洗洗一件衣服	星期天在家洗洗衣服 「日曜日は家で服を洗う」

(9)“不”を用いる否定の構造で、動詞がたとえ重ね型でなくとも、その目的語は一般に数量詞を排除する。

(*) 今天不谈两个问题	今天不谈问题 「今日は問題を話さない」
(*) 这个月不演三场电影	这个月不演电影 「今月は映画を上演しない」

本稿の目的は更に多くの事実を並べるのではなく、上述の現象とその他の関連する現

象に対して、統一の解釈を行いたいということである。一種の可能な解釈として、ある種の統語的な組み合わせは数量詞がなければ成立できない、あるいは自由ではないというのは、名詞要素の「定」、「不定」の制約を受けるということである。たとえば：

*倒缸里水	倒缸里一桶水	把水倒缸里
	「かめに一杯の水を注ぐ」	「水をかめに注ぐ」
(*) 送学校油画	送学校一幅油画	把油画送学校
	「学校に一枚の油絵を贈る」	「油絵を学校に贈る」
(*) 吃了苹果	吃了一个苹果	把苹果吃了
	「リンゴを１つ食べた」	「リンゴを食べた」

左列中の目的語に当たる裸の普通名詞“水”“油画”“苹果”は定かそれとも不定か決して明瞭ではないが、前に数量詞を加えると明確に不定になる。もしこれらの要素が定であれば、右列の“把”構文を用いて表現すべきである。

定と不定を用いて数量詞の統語構造に対する制約を解釈することは、いくらかの困難に出会う。動詞の後の目的語は大多数が不定であるが、しかし定であってもよいのである。まず、数量詞を用いなければ成立できないかあるいは自由ではないいくつかの統語的な組み合わせで、もし動詞の後の目的語を明らかに定の要素に変えると、逆に成立するかあるいは自由になってしまうものがある。たとえば：

(*) 前面走来老太太	前面走来张老太太
	「前から張おばあさんがやって来た」
(*) 他吃了苹果	他吃了那个烂苹果
	「彼はあの腐ったリンゴを食べた」
(*) 我一口气读完小说	我一口气读完王蒙那篇意识流小说
	「私は一気に王蒙の独白小説を読んだ」

次に、ある数量詞を排除する統語的な組み合わせで、もし数量詞を伴う名詞要素を定に変えるなら、結果として成立することができる。たとえば：

(*) 他正吃着三碗饭　　他正吃着你刚做的饭
「彼はあなたが作ったばかりのご飯を食べている」
(*) 今天要谈谈两个问题　今天要谈谈这个问题
「今日はこの問題を話さねばならない）
(*) 今天不谈两个问题　　今天不谈这两个问题
「今日はこの二つの問題を話さない」

その他、定や不定でも“*雪白衣服”と“*白一件衣服”のように成立できない修飾タイプの統語的な組み合わせを解釈できない。

数量詞の統語構造の制約作用は、実際に人類の認知における「有界」(bounded) と「非有界」(unbounded) の一種の基本対立を具体的に表現していると考える。人々がモノを感知し認識する時、モノは空間において「有界」と「非有界」の対立があり、人々が動作を感知し認識する時、動作は時間上に「有界」と「非有界」の対立があり、人々が性状を感知し認識する時、性状は“量”あるいは程度においても「有界」と「非有界」の対立がある。人類の認知におけるこの種の基本対立は必ず語法構造に反映するところがあるはずであり、語法分析の一つの任務はこの種の反映を示し出すことである。

2. モノと名詞の「有界」と「非有界」

モノは空間を占有し、空間に「有界」と「非有界」の区分を持つ。たとえば、一台のテーブルは一定の空間を占め、さらに一定の境界を有する。それはひとつの「個体」であり、有界のモノである。それに反して、水もまた空間を占めるが、一定の境界を持たない。水は個体ではなく、非有界のモノである。有界のモノと非有界のモノの区別の特徴は Langacker (1987) によれば主に以下のいくつかである：

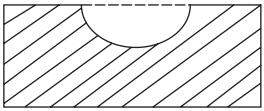
(ｉ) 非有界のモノの内部は同質 (homogeneous) であり、有界のモノの内部は異質 (heterogeneous) である。たとえば、水はどのように分割しようと、分けられたどの一部分もやはり水である。対して、一台のテーブルは異なる部分（テーブルの面、脚など）から構成され、テーブルを分割した結果はもうおそらく一台のテーブルではない。

(ⅱ) 非有界のモノは同質性を持つため、伸縮性を有する。有界のモノは異質性を持つため、伸縮性を有しない。水はいくらか加えたり、減らしたりしても依然として

水であるが、一台のテーブルは増やしたり減らしたりすると、もう一台のテーブルではなくなるのである。

（ⅲ）有界のモノは再現可能性（replicability）を持つが、非有界のモノにはない。一台のテーブル、二台のテーブル、三台のテーブル、……、n 台のテーブルとはなるが、水にはこのような再現可能性はない。

強調して説明したいのは、「有界」と「非有界」は主に人の認識を指し、客観的な現実を指すものではない。たとえば、穴はあるくぼんだ場所であり、開口部には境界はない。しかし、人のゲシュタルト（gestalt）心理は穴を周囲四方がみな境界を持つ個体とみなし、下図のように示す：[8]



次に、境界は往々にして、あいまいである。たとえば、塀の角であるが、塀の角に一定の境界があると言うのは難しく、塀に一本の境界線を引き、この線を越えるともう塀の角ではないと言うこともできない。しかし、我々はやはり、塀の角は境界を持つ個体とみなし、“一个墙角”「ひとつの塀の角」という。さらに、境界は抽象的である。たとえば、“主意”「アイデア」は抽象的なモノであるが、われわれはそれを始まりと終わりがある、境界を持つ個体と見なし、“一个主意”「ひとつのアイデア」という。同様に、“一种水”「ある種の水」という時に、それはほかの種類の水と区別する境界を持つと認識する。総じて、有界と非有界の区別は人間の感知と認識を基準とするものである。

モノが形成する概念上の「有界」と「非有界」の対立に対する語法上の典型的な反映はすなわち名詞には可算物と不可算物の対立があるということである。世界中の多くの言語に「数」の語法カテゴリーがある。[9] 英語を挙げるなら、可算名詞では、たとえば table「テーブル」は前に不定冠詞（a table）と数詞（one table, every table）をおくことができ、複数形式（tables）も可能である；不可算名詞では、たとえば、water「水」は一般に不定冠詞（*a water）と数詞（*one water, every water）は用いることができない。一般には複数形式（*waters ミネラルウォーターを指す場合を除く）もない。中国語は「数」の区分はないが量詞がある。[10] 可算名詞は自ら適用できる個体量詞

を持つ。たとえば、书「本」(本)、灯「灯り」(盏)、笔「ペン」(枝)、马「馬」(匹)、商店「商店」(家)である。不可算名詞は適用できる個体量詞がないので、度量詞(一尺布「一尺の布」、一斤肉「肉 500g」)、臨時量詞(一桶水「桶一杯の水」、一袋面粉「小麦粉一袋」)や不定量詞(一点儿水「少しの水」、一些药「いくらかの薬」)が使えるだけである。(朱 1982:41)全面的な言語調査によると、「数」のカテゴリーと量詞はお互いに補い合っているものである。およそ「数」を持つ言語は一般に量詞を必要とせず、量詞を持つ言語は一般に「数」が必要とされない。「数」であろうと量詞であろうとすべては概念上の有界のモノと非有界のモノを区別する一種の語法手段である(Lyons 1977:227 参照)

有界のモノは個体であり、個体のみが数えられ、数えられるモノは必ず個体である。モノの個体性と可算性は同じことである。統語的な組み合わせにおいて、我々は有界のモノを指す名詞要素を「有界名詞」と呼び、非有界のモノを「非有界名詞」と呼んでいる。一般に数量修飾語を持つ名詞要素は何れも有界名詞である。たとえば、两条鱼「魚二匹」,四桶水「桶四杯の水」,(睡)一个觉「ひと眠り(する)」,(买)辆车「車一台(買う)」,好些人「大勢の人」など。有界名詞の形式で最も典型的なものは“数量名”「数詞+量詞+名詞」であるが、“数量名”だけに限らない。固有名詞は専ら1つまたは1種類のモノを指す。このため、やはり境界がある。たとえば:“鲁迅”,“張大妈”「張おばさん」,映画“红高粱”「赤いコウリャン」など。固有名詞の前に“(一)个”を加え修飾しても、指し示す対象は変化しない。たとえば、“张大妈就是热心肠|这个张大妈就是热心肠”「張おばさんは親切だ」、“中国出了个毛泽东”「中国に毛沢東が現れた」など。指示詞“这、那”を伴う名詞要素の多くもまた個体のモノを指すので、有界である。たとえば:这个苹果「このりんご」,那种药「あの(種類の)薬」,那房子「あの家」などである。しかし、一部は総称的(generic)でもあり、個体のモノを指さないので、非有界となる。[11] たとえば:

我发觉这女人全是死心眼儿。
「私は女性がすべて頑固であることに気づいた」。
这烟对身体有害是谁都知道的,为什么还有那么多人抽?
「タバコが体に有害であることは誰でも知っているのに、なぜまだこんなに多くの人が吸うのか?」

方梅と张伯江（1995）が指摘するように“这女人”「女性というもの」と“这烟”「タバコというもの」の“这”はすでに意味をもたない。[12] 这と英語の総称定冠詞は似通っている。（英語の例：The German is a good musician.「ドイツ人はみな音楽が得意だ。」）統語的な組み合わせの裸の普通名詞に具体的な分析を加えると、多くは総称的なものであり、個体のモノを指さないので、非有界となり、目的語になるときにはとりわけこのようになる：たとえば（他不常抽）烟「（彼はあまり）タバコ（を吸わない）」、（后面又来）车（了）「（後ろにまた）車（が来た）」、人（离不开）水「人（は）水（から離れられない）」。しかし、主語或いは“把”構文の目的語になる裸の普通名詞は往々にして専らある個体を指すので、有界である。たとえば：书（读完了吗？）「本（読み終わりましたか?）」、（把）苹果（吃了）「りんご（を食べた）」。

「有界－非有界」の対の概念と「定－不定」の対の概念は同じではない。“买两条鱼”「魚を二匹買う」と“买这两条鱼”「この二匹の魚を買う」の名詞要素は１つは不定でもう１つは定であるが、いずれも有界である。これはすなわち定の名詞は一般に有界名詞でもあるけれども、不定名詞は往々にして非有界名詞ではない。「有界－非有界」と「特定－一般」も完全には重ならない。“他在找一个会讲广东话的人”「彼は広東語を話せる人を探している」における“一个会讲广东话的人”は専らある一人の人を指すことも、広東語を話す誰か一人を広く指すこともできる。しかし、両者は何れも有界である。これはつまり、特定名詞は通常有界名詞でもあるが、しかし、一般名詞は必ずしも非有界名詞ではないということである。有界名詞の本質はその指し示すモノの個体性と可算性であり、非有界名詞の本質はその指し示すモノの非個体性と不可算性である。

3. 動作と動詞の「有界」と「非有界」

動作もまた空間において進行しなければならない、動作の主な特徴は時間を占有することであり、時間を占有しない動作は想像できない。時間において、動作は「有界」と「非有界」の区分を持つ。有界動作は時間軸上に一つの始点と終点を持ち、非有界動作は始点と終点がない、あるいは、開始点のみがあり、終了点を持たない。たとえば“我跑到学校”「私は走って学校に行った」という動作は、走り出したのが動作の開始点であり、学校に着いたのが動作の終了点である。[13] このため、この動作はひとつの「個体」動作、あるいは「有界」動作である。それに対し、“我很想家”「家が恋しい」という動作では、われわれは開始点や終了点を確定できないために、この動作は「非個体」動作

あるいは「非有界」動作である。有界動作と非有界動作の対立は有界のモノと非有界のモノの対立と平行性を持つ（Langacker1987）。具体的には以下のように説明できる。

（ｉ）非有界動作の内部は同質であり、有界動作の内部は異質である。“我很想家”を時間上において任意に分割しても、取り出されたどの一部分もやはり“我很想家”である。相反して、“我跑到学校”という動作は、終点のみが“跑到学校”「走って学校に行く」に見なされ、その他の時刻は走っているか、あるいは走り始めただけである。

（ii）非有界動作は、伸縮性を有するが、有界動作には伸縮性を有しない。“我很想家”を延長した時間上に、時間をいくらかを加えたり、減らしたりしても依然として“我很想家”であるが、“我跑到学校”は時間上に、時間をいくらか増やしたり減らしたりすると、恐らくもう“我跑到学校”ではなくなってしまうかもしれない。(14)

（iii）有界動作は再現可能性があるが、非有界動作にはない。“我”「私」は一回、二回、三回、……、n 回と“跑到学校”できるが、“我很想家”は一般に何度も“想”できない。

また、強調しなければならないのは、動作の「有界」と「非有界」もまた、人の認識を基準とし、客観的現実とは必ずしも完全に一致しないことである。“我想家想了好几次”「何度も家を恋しく思う」と言う時、私は“我想家”をひとつの明確な時間境界を持つ動作と「みなす」のである。

動作が形成する概念上の“有界”と“非有界”の対立が語法に典型的に反映するのは動詞には未完了動詞（imperfectives）と完了動詞（perfectives）の区別があるということである。(15) ある語法書はその他の名称を用いる。たとえば性質動詞と動作動詞、静態動詞（static verb）と動態動詞（dynamic verb）のように名称は異なるが、本質は大同小異である。たとえば英語なら、動詞の最も重要な分類はすなわち未完了動詞と完了動詞である。（Quirk, et al.1972）典型的な未完了動詞は resemble（像）、like（喜欢）、belong to（属于）、need（需要）など単純な現在時制であり、進行形はない：

Harry resembles his father.　　*Harry is resembling his father.
「ハリーは父親に似ている」
Paul likes swimming.　　*Paul is liking swimming.

「ポールは水泳が好きである」

相反して、典型的な完了動詞 arrive（来到）、jump（跳）、eat（吃）などは進行形があり、単純な現在時制はない：

*The train arrives.　　The train is arriving.
「列車は到着している」
*Tom jumps.　　Tom is jumping.
「トムは跳んでいる」

そのほかに、完了動詞は重複進行を表す副詞 again and again「何度も」の修飾を用いることができるが、未完了動詞はできない。たとえば：

Tom hit the target again and again.　*Tom resembled his father again and again.
「トムは標的に何度も衝突した」

中国語の動詞にも似たような分類がある。たとえば赵元任氏（1968）はかつて、他動詞を「動作」動詞（Vt）と非動作動詞（「性質」動詞（Va）、「分類」動詞（Vc）などを含む）に分類した。[16] 前者は“着”を付加でき、重ね型がある。たとえば、“吃着”「食べている」、“吃吃”「ちょっと食べる」である。後者は一般に“着”を付加できず、また、重ね型もない。たとえば“*爱着”“*爱爱”“*姓姓”である。马庆株（1981）もまた接尾辞“着”を付けることができるかどうかに基づき、動詞を未完了動詞と完了動詞の二種類に分類している。この二種類の動詞の成員は中国語と英語では完全には対応していないが、各々の典型的な成員あるいは基本成員は対応するものである。英語の未完了動詞は進行形にはなれないが、中国語の未完了動詞（性質動詞、分類動詞）が動作の持続を表す“着”を付加できないのはいずれも未完了動詞が時間上非有界であり、それ自体がすでに持続あるいは進行の意味を持つからであり、さらに進行形あるいは“着”を加えると余剰になる、つまり、“同性排斥”「同じ性質のものは排除される」となる。英語の完了動詞が again and again の修飾を用いることができ、中国語の完了動詞（動作動詞）が重ね型を持つことができるのは、何れもこの種類の動詞が時間において有界であり、「再現可能性」を持つからである。これはつまり“同性相容”「同じ性質の

ものは受け入れられる」ということである。

4.「活動」（活动）と「事象」（事件）

第一節で列挙した、数量詞を用いなければ成立しない、あるいは不自由となる統語的な組み合わせは主に二種類に分けることができる。一つは動目構文であり、もう一つは連体修飾語（定語）＋名詞の修飾構文である。まずは動目構文において数量詞が必須の状況について分析してみよう。必須の数量詞が目的語に現れる場合、その前にある動詞そのものも複雑な動詞フレーズであり、それには以下のものが含まれる：

（1）動詞＋間接目的語からなる動目構造

盛碗里（两条鱼）「（魚を二匹）碗に盛る」｜来这儿（两个人）「（人が二人）ここに来る」｜掉地上（五分钱）「（五分のお金を）落とす」｜送学校（一幅油画）「(一幅の油絵を)学校に贈る」

これらの間接目的語のあるものは、移動の着点を表す場所目的語（碗里，这儿，地上）であり、あるものは「授受」の対象を表す受容者目的語（学校）である。

（2）動詞＋結果補語からなる動補構造

打破（一块玻璃）「（ガラスを一枚）叩き割る」｜飞了（一只鸽子）「（鳩が一羽）飛んだ」｜洗完（两件衣服）「（服を二枚）洗い終わった」

（3）動詞＋方向補語からなる動補構造

走来（一个老太太）「（老婦人が）歩いてやってくる」｜飞进来（一只苍蝇）「蠅が一匹飛び込んできた」｜拿来（三本书）「(本を三冊)持ってくる」

（4）動詞＋完了あるいは実現を表す接尾辞“了”

吃了（一个苹果）「（りんごを１つ）食べた」｜写了（两封信）「（手紙を二通）書いた」｜看了（两场电影）「（映画を二本）見た」

（5）動詞＋“了”＋間接目的語からなる動目構造

烫了他（一个大燎泡）「彼はやけどで大きな水ぶくれができた」｜叮了小王（两个大包）「（蚊が）王さんを刺して腫らした」｜捂了孩子（一身痱子）「汗が子供の身体を覆った」

これら複雑な動詞フレーズも当然のことながら動作を表すが、これらに対応する単純動詞“盛「盛りつける」、掉「落とす」、送「贈る」、打「叩く」、飞「飛ぶ」、洗「洗う」、走「歩く」、吃「食べる」、写「書く」”などが表す動作とは明らかな違いがある。前者が表す動作は時間上に開始点を持つばかりでなく、内在的な自然終了点も持つ。よってこれらは「有界」である。後者は、開始点はあるものの、内在的な自然終了点を持たない（あるいは、終了点はいつであっても良いとも言える）。したがって、これらは「非有界」である。断っておかねばならないが、「有界」と「非有界」は、一定の範囲内で相対的に言われるものであって、前節で“吃”、“写”などの動詞が有界だと言ったのは、動詞全体の範囲の中で“像”、“姓”といった未完了動詞と比べてのことで、ここで“吃”、“写”が非有界だと言うのは、完了動詞要素（単純動詞とは限らない）の範囲内で、“吃了”、“写好”といった複雑な要素と比べての話であり、この二つは別に矛盾しない。試みに“(把鱼）盛碗里”「(魚を）碗に盛りつける」と“盛（鱼)”「(魚を）盛りつける」の二つの動作を比べてみると、前者では、盛りつけ始めたのが動作の開始点であり、魚が碗の中に到達したのが動作の終了点である。よって、“盛碗里”「碗に盛りつける」は一つの「個体」動作、あるいは「有界」動作である。この動作の内部は「異質」である。つまり「碗に盛りつける」プロセスにおける「部分」とは「碗に盛りつける」ことではなく、「盛りつける」ことあるいは「盛りつけ始める」ことにすぎない。それに対して、“盛鱼”という動作には内在的な終了点がないので、「個体」動作あるいは「有界」動作ではない。この動作の内部は「同質」であり、魚を盛りつけるプロセスのいかなる部分も、同様に魚を盛りつける動作である。動結構造や動趨構造も完了の意味を持ち（吕叔湘 1984・1987、张伯江 1991 参照)、「動詞＋“了”」と同様に、内在の自然終了を持つので、「有界」の動作を表す。[17] 以下、内在の終了点を持つ有界の動作を「事象 event（事件)」、内在の終了点を持たない非有界の動作を「活動 activity（活動)」と称することにする。“盛碗里”と“盛”、“打破”と“打”、“飞进来”と“飞”、“吃了”と“吃”はいずれも前者が「事象（事件)」を、後者が「活動（活動)」を表している。

語法形式上では、事象を表す動詞要素（事象動詞と略称する）と活動を表す動詞要素（活動動詞と略称する）には、少なくとも以下の対立が存在する：

（ｉ）活動動詞はほとんど“在”「～している」と連用できるし、“着”とも連用できるが、事象動詞のあるものは“在”・“着”ともに連用できず、あるものは“在”とだけ連用できて“着”とは連用できない。

在盛,	盛着	*在盛碗里	*盛碗里着
「盛り付けている」	「盛り付けてある」		
在打,	打着	*在打破	*打破着
「叩いている」	「叩いている」		
在飞,	飞着	在飞进来	*飞进来着
「飛んでいる」	「飛んでいる」		
在吃,	吃着	*在吃了	*吃了着
「食べている」	「食べている」		

事象動詞が一般に“着”あるいは“在”と連用できないのは、明らかにその有界性によるものである。魚の盛りつけを例に取れば、“正在盛着鱼”「魚を盛りつけているところ」には“盛鱼”「魚を盛りつける」の意味は含まれる（前者が真ならば、後者も必ず真である）が、“鱼盛到碗里”「魚を碗に盛りつける（つけた）」の意味は含まない。（前者が真であっても、後者が真とは限らない）別の言い方をするなら、事象動詞の有界性あるいは完了性は、“在”/“着”の進行性あるいは持続性とは矛盾するのである。

（ii）一定の長さの時間（时段）を現す語句と連用することで、活動動詞は動作の持続時間、すなわち開始点から発話時までの時間の長さを表し、事象動詞は（動作そのものがある時間持続するのであれば）動作が持続した時間を表すこともできれば、動作が終わった後の状態が持続する時間を表すこともできる。马庆株（1981）、陈平（1988）、Smith（1991）などに、この点についての論述がある。[18]

盛鱼盛半天了，还没有盛完。　盛りつけ始め　“半天”　発話時 →
「魚を盛りつけてだいぶ時間が経つがまだ盛りつけ終わっていない」。
鱼盛碗里半天了，早就凉了。　盛りつけ始め　魚が碗に至る　“半天”発話時 →
「魚を碗に盛ってだいぶ時間が経ち、とっくに冷めてしまった」。

“盛碗里”、“打破”などは、事象の開始点と終了点の間隔が無視してもかまわないくらい短い、あるいはこの類の事象は瞬時に完成するものだとも言えるので、一点の長さの時間を表す語句は事象が終了した後の状態の持続の長さのみを表す。事象動詞のあるものが、事象そのものが一定の時間持続することを表す場合は、一定の長さの時間を表

す語句は事象が持続する時間を表す。（下記参照）

（ⅲ）活動動詞は、“马上”「すぐ」、“一下”「ちょっと」といった時点を表す語句との連用において、事象動詞とは異なるふるまいをする。（詳細は鄧守信 1986 を参照）[19] “写信”（活動）と“写好信”（事象）を例に取ると、“马上”は活動動詞にも事象動詞にも使うことができるが、前者は活動の開始点を指し示し、後者は事件の終了点を指し示す。“一下”は事象動詞にのみ用いられ、事件の終了点を指し示す。

我马上写信。(開始点を指し示す)　　*我一下就写信。
「私はすぐに手紙を書く」
我马上写好信了。(終了点を指し示す) 我一下就写好信了。(終了点を指し示す)
「私はすぐにきちんと手紙を書いた」「私はしばらくして手紙をきちんと書いた」

（ⅳ）活動動詞は“不”でしか否定できず、事象動詞はふつう“没”でしか否定できない。

不盛鱼　　*没盛鱼　　(*) 不盛碗里　　没盛碗里
「魚を盛りつけない」　　「碗に盛り付けなかった（盛り付けていない）」
不飞　　*没飞　　(*) 不飞进来　　没飞进来
「飛ばない」　　「飛び込んでこなかった（飛び込んでいない）」
不打玻璃　　*没打玻璃　　(*) 不打破玻璃　　没打破玻璃
「ガラスを叩かない」　　「ガラスを叩き壊さなかった（叩き壊していない）」

ここで“没盛鱼”「魚を盛り付けなかった（盛り付けていない）」、“没飞”「飛ばなかった（飛んでいない）」、“没打玻璃”「ガラスを叩かなかった（叩いていない）」に*をつけたのは、“没 V”が実際に否定しているのは“V”ではなく“V 了”であると多くの人が指摘しているからである。つまり“盛鱼”、“飞”、“打玻璃”といった活動ではなく、“盛了鱼”「魚を盛り付けた」、“飞了”「飛んだ」、“打了玻璃”「ガラスを叩いた」といった事象の否定なのである。これは、これらに対応する肯定形式（盛了鱼，飞了，打了玻璃）から検証することができる。石毓智（1992a）は、漢語の“没”と“不”の最も基本的な役割分担は、“没”が専ら「離散性」（つまり有界性）の要素を否定し、“不”は

専ら「連続性」（つまり非有界性）の要素を否定することだと全面的に論証した。[20]

「単一動詞＋目的語」の組み合せにも、「活動（活動）」と「事象（事件）」の別がある。陈平（1988）は位相（phase）構造の特徴にもとづいて、この種の組み合せを「活動類状況」と「達成類状況」に分けたが、これは我々の「活動」・「事象」の分け方と同じである。[21] 目的語が普通の裸名詞であれば、組み合せ全体は「活動（活動）」を表し、目的語が固有名詞、“这/那”＋（量詞）＋名詞、数量＋名詞であれば、組み合せ全体は「事象（事件）」を表す。

活動：读书「本を読む」，写字「字を書く」，看电影「映画を見る」
事件：读《红楼梦》「≪紅楼夢≫を読む」，写几个字「何文字か書く」，看那场电影「あの映画を見る」

事象を表す動目の組合せは、上記で考察した事象動詞と同じく、内在自然終了点を含んでいる。たとえば、『紅楼夢』を読み終わる、何文字かを書き終わる、その映画が終わる、などは動作の自然終了を意味している。一方、語法表現上においては、これらは上述の事象動詞とは異なり、“在”あるいは“着”と連用できる。なぜならばこれらが表示する事象（事件）は瞬時に完成するものではなく、一定の時間持続するからである。またそれだからこそ、これらが一定の時間の長さを表す語句と連用された場合には、事象が終結した後の状態の持続の時間をも、動作そのものが持続する時間をも表すことができるのである。

他读《红楼梦》读了一年了。彼は『紅楼夢』を一年読んでいる。
（a）到现在还没有读完。現在もまだ読み終わっていない。（動作の持続時間）
（b）内容有点儿忘了。内容を少し忘れてしまった。（動作終結後の状態の持続時間）

陳平が正確に指摘しているように、ここの“书”、“电影”などはいずれも「非指示的nonreferential」あるいは一般的要素であり、具体的に一つの事物を指し示しているわけではない。[22] 本稿の観点を用いて言えば、これらはすべて「非有界」のモノを指し示

しているのである。『紅楼夢』・何文字か・あの映画などはいずれも「明確な空間の境界線を有し」ており、表しているのは「有界」のモノである。

ここで、数量詞の語法構造に対する制約とは、実際には「有界」「非有界」の語法構造に対する制約であると、我々は見ることができる。

“盛碗里鱼”、“打破玻璃”、“飞进来苍蝇”、“吃了苹果”等の統語的な組み合わせが成立しない、あるいは不自由であるのは、その中の有界動詞（事象動詞）が後ろの非有界名詞と整合性に欠けているためである。換言すれば、有界動詞（事象動詞）の後ろに有界名詞目的語がつくことで、その動作の自然終了点が確保されることとなり、更に「実際の」終了点となり、組み合わせ全体がきちんと整った事象を伝えられることとなる。第二節で述べたように、有界名詞は「数量名」の組み合わせばかりではなく、さらに固有名詞、这/那＋(量)＋名、及び幾つかの制限された修飾語をもつ名詞なども含まれる。これは、なぜ数量詞を用いなければ不自由である統語的な組み合わせが、目的語を固有名詞等に取り替えることで自由なものに変えられるのか、という点を説明している。つまり、モノの有界と動作の有界には相通じるものであり、両者には「はっきりとした対応関係が存在している」(陳平 1988：15)。この繋がりは、他にも例証がある。それは有界のモノと有界動作は、同じ言語形式を用いて表すことができるというものである。たとえば、“苹果”、“水”は類別名としては非有界のモノとされるが、数詞“一”を加えた、“一个苹果”、“一桶水”は有界のモノに変わるのである。同様に、“烧”「燃やす」、“坐”「座る」の表す動作は非有界であるが、“一”を加えると有界のものとなる。たとえば詹开第（1987）が指摘するように、下記の例文中の「“一”＋動」は短時間の動作が完了あるいは出現することを表すものであり、つまり事象（事件）を表すものである。

> 把他那份儿神像一烧!「その神仏像を全部ひと焼きせよ」
> 这位老道进到屋里，往那这么一坐。「こちらの道士は部屋に入ると、そちらへひと座りした」
> ……每人三十个羊肉冬瓜馅的煮饺子，吃完了一散。「…一人三十個の羊肉と冬瓜のあんの水餃子を、食べ終わるなり引き揚げていった」

英語での表現形式は異なるが、同様に問題点を説明している。たとえば、下記の例文(a) の動詞は「事象」（事件）を示すものだが、それを「名詞化」した後に不定冠詞

“a”を加えることができるが、(b) の動詞は「活動」(活動) を示しているので、「名詞化」の後に不定冠詞をつけることはできない。(Mourelatos 1981)

(a) Mary capsized the boat. (玛丽把船弄翻了)「メアリーが船を転覆させた」
→There was a capsizing of the boat by Mary.「メアリーによる船の転覆があった」

(b) John pushed the cart for hours. (约翰推车推了几小时)「ジョンはカートを数時間推した」
→For hours there was pushing of the cart by John.「数時間ジョンがカートを押すことがあった」

自然終了点を有する動作を実際の終了点を有するものに変えるには、有界名詞を目的語とする以外に別の手段もある。最も常用されるのは動詞の前に“已经”「もう」などの動作完了を表す時間語句を加えること、あるいは動詞の後ろ、あるいは文末に“了”をつけることである。ここでは“弄脏”「汚す」と“响起”「響く」という二つの事象 (事件) 動詞を例とする。

(*) 小张弄脏衣服
「張さんは服を汚す」
小张已经弄脏 (了) 衣服
「張さんはもう服を汚した」
小张弄脏了衣服
「張さんは服を汚した」
小张弄脏 (了) 衣服了
「張さんは服を汚した」
小张弄脏 (了) 一件衣服
「張さんは服を一枚汚した」

(*) 礼堂响起掌声
「講堂は拍手が響き始める」
礼堂已经响起 (了) 掌声
「講堂はもう拍手が響き始めた」
礼堂响起了掌声
「講堂は拍手が響き始めた」
礼堂响起 (了) 掌声了
「講堂は拍手が響き始めた」
礼堂响起 (了) 一阵掌声
「講堂はひとしきり拍手が響き始めた」

“已经”あるいは“了”を加えると、後ろの裸の普通名詞は有界名詞に転ずる傾向があり、“小张已经弄脏衣服”の“衣服”はある一着の若しくはいくらかの衣服と理解す

べきであり、広く一般を指した不特定の衣服ではない。このことから、数量詞、“已经”などの時間副詞と“了”は、何れも共通の語法機能を有し、非有界概念を有界概念へ変えることができるということがわかる。前述の例文の中で、動詞の後ろの“了”が自由に現れたり現われなかったりしている点に注目し、李兴亚（1989）はこの現象についての討論の場において、五つの要素に言及しており、その中の四つの要素については何れも理解し易い。たとえば動詞の前には“已经”などのような語句があり、動詞の後ろには結果の意味を表す補語があること、文末には“了”が付くことなどである。ただ動詞の後ろに数量フレーズがあるという要因だけは「いまだ合理的な解釈をみつけだせない」。現在解っているのは、数量フレーズの「有界性」は動詞の後ろの“了”を自由に現れたり現われなかったりさせる制約となっている一つの要因であるということである。数量詞と“了”は同じような作用を有し、いずれも自然終了点のない動作を自然終了点がある動作にする（“吃饭”から“吃一碗饭”と“吃了饭”へと変わるように）あるいは動作の自然終了点を実際の終了点にかえさせることもできる（“吃一碗饭”から“吃了一碗饭”或いは“吃一碗饭了”に、また“吃了饭”から“吃了一碗饭”或いは“吃了饭了”に変わるように）。[②] 動詞が実際の終了点をもたなければ、相応する文は「事象文」にならない。いわゆる事象文とはある独立した、完全に整った事象を叙述した文なのである。次の文は何れも「非事象文」に属するものであり、実際の終了点はなく、上述の制約も作用しない。[③]

従属文　飞进来苍蝇就打。　她吃了苹果就吐。
「蠅が飛び込んでくると叩く」　「彼女はりんごを食べると吐きだす」

慣用文　食堂老飞进来苍蝇。　他常送我礼物。
「食堂には蠅がいつも飛び込んでくる」　「彼はいつも私に贈り物を贈る」

命令文　给我吃的!　付她工钱!
「食べ物をよこせ」　「手間賃を払え」

疑問文　送学校油画?　谁出的主意?　打碎花瓶?
「学校に油絵を贈る?」「誰が出したアイディア？」「花瓶を叩き壊す?」
那不是我干的!
「あれは私がしたことではない」

見出し文　售货员气跑顾客。　小厂引进外资。
「店員が顧客を怒らせて逃した」「小工場は外資を導入する」

「事象文」と「非事象文」の対立は人類言語の普遍現象である。この二種類の文を「叙述文」と「非叙述文」、または「平叙文」と「非平叙文」などと称する人もいる。[④] 石毓智（1992a）はこの二種類の文をそれぞれ「客観文」と「主観文」と称し、漢語と他の言語における両者の統語的な対立についてかなり詳細な論述を行っている。[(23)] この二種類の文の対立も「有界」と「非有界」なるものの概念に対する語法上の反映である。連続事象に対する叙述はどうしても一つの事象がまたもう一つの事象に続くので、事象と事象の間には有界線が必要となる。人はこのようにして世界を認識するものであり、このような認識に従って言語を用い、その世界を述べているのである。

事象 1｜事象 2｜事象 3｜事象 4……→

いわゆる不自由な語法構造というのは実際には何れも「非事象文」であるが、自由な統語構造は「事象文」もあれば、「非事象文」（たとえば慣用文、疑問文、命令文）もある。自由な統語構造と不自由な統語構造の間の対立は「有界」と「非有界」の文レベルにおける反映であり、「事象文」と「非事象文」の間の対立は即ち「有界」と「非有界」の談話（discourse）における反映なのである。

5.「延長動作」と「定時動作」

これより動目の統語構造が数量詞を排除する状況を考察する。上記の分析によれば、“架炮”「大砲を据え付ける」は非有界動詞であり、活動を表すが、“架山上”「山に据え付ける」、“架好”「きちんと据え付ける」、“架了”「据え付けた」等は有界動詞であり、事象を表す。では、“架着（炮）”は何に属するのか?“架着炮”には二つの意味がある。ひとつは静態的存在（山上に大砲があるという意味）を表し、もうひとつは動作（大砲を据え付けている最中という意味）を示す。静態的存在は動作の時間上での有界非有界とは何ら関係しないので、ここでは考慮しない。問題は動作を表す“架着炮”が活動に属すのかそれとも事象なのかということである。“架着炮”は“架炮”と同様に時間に自然終了点はないので、事象ではない。しかし、“架着炮”はまた“架炮”という活動とは区別される。“架炮”は自然な終了点はないものの、「任意」の終了点はある。けれども、“架着炮”には任意の終了点さえもない。

架跑ｎ天，架完了。「ｎ日間大砲を据え付け、据え付け終えた」
*架着炮ｎ天，架完了。

“ｎ天”は“架跑”にある任意の終了点を規定するが、“架着炮”とは相容れない、あるいは、“架着炮”と大砲を据え付ける動作の終了とは相容れないものとなる。数量目的語は紛れもなく動作の終了と密接な関係があり、これが動作を表す“山上架着炮”が数量詞を排除する原因なのである。我々は「動＋“着”」が示す任意の終了点のない動作を「延長動作」と称することで、「活動（活動）」と「事象（事件）」を区別する。

“*洗洗一两件衣服”、“(*) 谈谈两个问题”のように、動詞の重ね型も数量目的語を排除する。石毓智（1992b）は動詞の重ね型による数量要素を排除する原因を分析する時、「動詞の重ね型が表しているのは程度がかなり小さい確定量である」と指摘する。たとえば“看看书”「本をちょっと読む」、“下下棋”「将棋をちょっと指す」は時間量が短いことを表し、“看一会儿书”「本をしばらく読む」、“下一会儿棋”「将棋をしばらく指す」と言うことに等しく、“伸伸舌头”、「舌をちょっと出す」、“找找老师”「先生をちょっと訪ねる」は動作量が小さいことを表し、“伸一下舌头”「舌をちょっと出す」、“找一下老师”「先生をちょっと訪ねる」と言うことと等しい。つまりここに包含されている数量はどれも“一”という小さな“確定量”である。この意味から言えば、動詞の重ね型が表している動作は終了点を持つということだけでなく、「固定された」終了点をもつことにもなり、その動作が固定された境界線を持てば、数量要素との抵触（反発）が発生する可能性があり、これはあたかも大なり小なり機能を停止した小さな箱がいろんな数のものを自由に収められないようである。[5] 動詞の重ね型が表す固定終了点を有する動作を「定時動作」と言うことができる。次に、「活動」、「事象」、「延長動作」、「定時動作」の四種類の動作と目的語の中の数量詞との関係をまとめることにする。

延長動作	“架着，吃着，盛着”	終了点なし	数量詞を排除する
活動	“架，吃，盛，飞”	任意の終了点	数量詞を伴える
事象	“架好，吃了，飞进来，盛碗里”	自然終了点	数量詞を求める
定時動作	“吃吃，　架一架，　盛一下”	固定終了点	数量詞を排除する

終了点のない延長動作と固定終了点もつ定時動作は数量詞を排除し、自然終了点を持つ事象は数量詞をもたねばならず、任意終了点をもつ活動は数量詞を伴ってもよい（数量詞を伴った後は組み合わせ全体が事象に変わる。たとえば“架一门炮”という事象そ

のものが数量詞を含む)。

最後に、“不”を用いた否定の動目構造については、その目的語が数量詞を排除する原因も明らかである。上述のとおり、“没”は専ら有界要素を否定し、“不”は非有界要素の否定を担う。正に“不”のこの性質のために、“(*) 今天不谈两个问题”と“(*) 上星期不上四节课”のように数量目的語(有界名詞)をもった統語構造は不自由なものである。(注①を参照)。“不”を“没”に換えると、“今天没谈两个问题”「今日は二つの問題を話さなかった」と“上星期没上四节课”「先週は四コマ授業に出なかった」はいずれも通じるようになる。

6. 性質状態と形容詞の「有界」と「非有界」

人はモノと動作を感知し認知すると同時に、その性質や状態(以後“性状”と略称)も感知し認識する。モノは空間の中で「有界」と「非有界」に分けられ、動作は時間の中で「有界」と「非有界」に分けられる。性状となると程度または量において「有界」と「非有界」に分けられる。例を挙げていえば、“白”という色はモノの性状だが、“白”には各種程度の差があり、“雪白”「真白である」も白色であれば、“灰白”「青白い」も白色にはいる。“白”とはさまざまな種類の白色を代表するもので、どれとは決められない“量幅”「程度」を示すものだから、“白”が示す性状は「非有界」だといってもよいだろう。相反して、“雪白”や“灰白”となると、この“量幅”「程度」の中の「一定度」(“量段”)あるいは一点(“量点”)を示すものである。[6] それらと別の白との境界線はぼんやりしたものとはいえ、そこには境界線があると「感じる」のが常だから、それらが示す性状は「有界」なのである。同様に、歩くのが「ゆっくり」だと感知するとき、「ゆっくり」とは道を歩く動作の性状であるけれども、「ゆっくり」は「速い」に対する言い方なので、各種各様の「ゆっくり」がある、すると「ゆっくり」はある程度の幅を示すものとなるから、これは「非有界」なのである。相反して、「ゆっくりゆっくりと」、「のっそりと」、「とてもゆっくり」などとなると、決まった(比較的高程度の)ゆっくりさを示すもので、どれくらいの「ゆっくり」さなのか(量段または量点)を示すものなので「有界」なのである。ここで指摘しておかねばならないのは、この程度における有界と非有界もまた人の主観的推量が基準となっていることである。

性状の「有界」と「非有界」は漢語語法の中では形容詞の性質形容詞と状態形容詞の違いとなって現れてくる。朱徳熙氏(1956)は語法機能(分布)に基づき、形容詞をこ

の二つの種類に分け、かつ両者の区別は後者がいつも「一種の量の観念……とつながりを持つ」ところにあると指摘した。[24] これを私たちの述語を使っていえば、後者はいつも決まった部分や点を示すということである。状態形容詞の“雪白”・“慢腾腾”などは、どれくらいの程度かを示すものだから、性質形容詞“白”や“慢”のように“很”や“比较”、“非常”などの程度副詞で修飾することはできず、“很雪白”、“非常慢腾腾”という言い方はないのである。一方“很白”、“非常慢”となると、幅のある不定の意味から、もう決まった程度を示すものに変わっている。ここで強く指摘しておきたいのは、形容詞の有界と非有界は名詞や動詞の有界や非有界と平行性を持っているということだ。これは語法形式の上で少なくとも以下の幾種かとして現れている。

（ｉ）本稿第１節に挙げた数量詞の連体修飾語（定語）＋名詞の修飾構造への制約は何れも形容詞とそれがかかる名詞とが有界か非有界かという条件によって組み合わされるかどうかが決まるのだと説明できる。

白	衣服	*白	一件衣服	*雪白	衣服	雪白	一件衣服
红	脸	*红	一张脸	*红通通	脸	红通通	一张脸
糊涂	人	*糊涂	一个人	*稀里糊涂	人	稀里糊涂	一个人
干净	鞋	*干净	一双鞋	*干干净净	鞋	干干净净	一双鞋
好	车	*好	一辆车	*很好	车	很好	一辆车
(非)	(非)	(非)	(有)	(有)	(非)	(有)	(有)

左の“白一件衣服”などが成立しないのは、非有界の形容詞（たとえば“白”）が有界の名詞（たとえば“一件衣服”）には組み合わされないからであり、その右の“雪白衣服”などが成立しないのは、有界形容詞（たとえば“雪白”）が非有界の名詞（たとえば“衣服”）には組み合わされないからである。

“*白一件衣服”と“*雪白衣服”は成立しないのだが、これに“的”が加えられれば、“白的一件”（たとえば“这儿有两件衣服，我要白的一件”「ここに服が二着ある。私は白いほうがほしい」）及び“雪白的衣服”は共に成立するが、その原因はどこにあるのか。“的”の作用を見くびることはできない。呂淑湘氏（1979）は「“大的树”と“大树”を同じものとしてしまうと、まるで“的”の一字のあるなしはまったく関係がないように見えるが、これではこの“的”の注意が足りないのである。」と指摘する。陆丙甫

（1988）は意味の面から連体修飾語＋名詞による修飾構造の直接貼り付け形式の“小牛”と組み合わせ形式の“小的牛”を区別する時に、“小牛”には呼称性があり、これは“牛犊”を呼ぶときの呼称方法であると考えるが、実際には一般的呼称あるいは一般的通称に他ならない。[25] 一方“小的牛”は非呼称性であり、おそらく一頭の大人の牛で、体が割に小さいものを指すだろうから、これは個別の呼称形式または具体的呼称形式である。だとすると一本の大きな幼樹は“大的树”「大きい木」ではあっても“大树”「大きな木」ではないのである。この意味からいうなら、“的”の作用は非有界概念を有界概念に変えるものだと言えよう。このことは別の角度から証明できる。朱徳熙氏（1961）の分析では、“白”は形容詞だが、“白的”となると名詞性の要素であるという。[26] この点には同意できるが、名詞と形容詞とを比べて言えば、名詞は「有界性」を持ち、形容詞は「非有界性」を持つと指摘したくなる。この点については、石毓智（1992a）がまず最初に指摘し、検討を加えていた。石氏は「離散」と「連続」の二つの述語を使ったが、これは我々の「有界」及び「非有界」の区分とまったく同じである。名詞は通常数量詞で数を示すことができるが、形容詞はできない。この他に、先に述べたように、“没”は有界要素を否定し、“不”は非有界要素を否定する。名詞は有界性を持つので、通常は“没”で否定し、“不”では否定しない（没书/*不书，没水/*不水）。形容詞は非有界性を持つから、一般には“不”で否定し、“没”では否定しない（不重/*没重，不远/*没远，ここで、“没重”、“没远”に*を打つのは、“没”が否定しているのは“重”や“远”ではなく“重了”「重くなった」“远了”「遠くなった」だからである）。まさしく“的”と数量詞はともに非有界を有界に変える能力があるので、“干干净净衣服”を実際に言い得る有界の名詞にしようとすれば二種類の方法があることになる。一つは“干干净净一件衣服”であり、もう一つは“的”を加えて“干干净净的衣服”と変えてしまうのである。もし“*干净一件衣服”を実際に言いうる有界名詞に変えるとしても、“的”を加えて、“干净的一件”と変えればよい。注意しておかねばならないのは、これは動詞の後ろに付く“了”が非有界の動作を有界の動作に変えることと非常によく似ていることである。[27] たとえば、买票「切符を購入する」（非有界）、“买了票”「切符を購入した」（有界）である。第 4 節で述べたように、有界動詞の後ろに数量目的語があれば、動詞の後ろの“了”は、“买回来（了）两张票”「切符を二枚購入して買って帰ってきた」のように出現自由である。ここで有界形容詞の後ろに数量名詞が来ると、形容詞の後ろの“的”も、たとえば“干干净净（的）一件衣服”のように出現自由にな

ることに気づく。[7]“的”と有界非有界に関係する語法機能については、更に進んだ研究がなされねばならない。

（ⅱ）性質形容詞は非有界であるので、単独では述語になれず、述語になるときはいつも比較や対比の意味を持つ。状態形容詞は有界であるので、単独で述語になれる（朱徳熙 1982：7.7）。[28]

人小心不小。　　个儿小小儿的。
昨儿冷今儿不冷。　　今儿怪冷的。

更に指摘しておかねばならないのは、形容詞が述語となるとき、主語の名詞との間に有界と非有界において互いに影響関係が生じるはずであるということである。[8] 以下の例文では、同様に修飾語のない“纸”という裸の普通名詞が主語であり、性質形容詞“薄”が述語の時は、“纸”は一般的なものの非有界名詞として理解できるが、状態形容詞“薄薄的”が述語となるときには、“纸”は特定のものを指す有界名詞として理解しなければならない。

（a）纸薄，（不比玻璃，）一捅就破。「紙は薄く、（ガラスとは異なり）一突きですぐに破れる」
（b）（那层）纸薄薄的，一捅就破。「（あの）紙は薄いものであり、一突きですぐに破れる」

（ⅲ）状態補語となるとき、状態形容詞は“早已”「早くから既に」、“已经”「既に」、“马上”「すぐに」といった動作が有界である語句の修飾を受けられるが、性質形容詞はできない（朱徳熙 1982.9.8.4）：

早就想得很透彻　　*早就想得透彻
「とっくに考えが透徹している」
已经走得很远　　*已经走得远
「既に遠くまで歩いた」
马上忘得干干净净　　*马上忘得干净
「すぐにきれいさっぱり忘れた」

7. 最後に

「有界－非有界」の対立は人間の「一般認知機能」(general cognitive mechanism)の一部分であり、人類の最も基本的な認知概念の一つである。人は最初に自分の身体を通して有界のモノとは何かを認識し、有界と非有界の対立によって外界のモノ・動作及び性状を認知する。(Johnson1987)[29]「認知語法」の観点によれば、人の言語能力は人の一般認知能力の一部分であるのだから、認知上の「有界－非有界」の対立が、言語構造の中に反映されるのは必然である。我々は数量詞の語法構造に対する制約作用の原因を探り、その結果「有界－非有界」の対立が名詞・動詞及び形容詞に同様に現れていることを知った。これは先述の制約と関係する一連の語法現象に統一された解釈を行い、また人の認知特徴から語法現象を解釈することも可能であることを物語るものである。ここで重点的に指摘しなければならないのは本稿が得た結論は品詞理論に対する意味である。

伝統語法は意味から品詞分類を行ってきた。たとえば、名詞はモノの名称を示すものであり、動詞は動作や行為を示し、形容詞は性質や状態を示すというものだ。語の意味による品詞の分類では、問題は循環的論証に現れる。たとえば、“真理”・“電”・“良心”が名詞であると確定するとき、それらがモノの名称であると言う唯一の理由は、あらかじめそれらが名詞であると確定させていることによる。Lyons（1968：4.2.9）はかかる品詞理論を批判するおり、伝統語法が二つの性質の異なった問題をまぜこぜにしていたと指摘した。ひとつは品詞を分類する折の基準の問題であり、もうひとつは区分された品詞類に名称を与える時の問題である。品詞分類のよりどころはその言葉の語法機能（分布）であり、区分された品詞に適切な名称を与えるのはその意味による。たとえば、分布によってある品詞 X を区分するのに、その要素には“男孩儿，女人，草，原子，树，牛，真理，电，良心”を含んでいる。すべての要素がみなモノを指すとは言えないけれども、逆にモノを示すものはすべて X 類に属すとは言うことができるので、この X 類を「名詞」類と呼んでも良いのである。

構造主義語法は形式から出発（つまり語法機能あるいは分布に基づく）して品詞を分類するようはっきりと提案しまた実践しているが、それは伝統語法の意味からの出発に比べて一層厳格になっており、品詞理論の大きな進歩であり、十分に肯定するべきである。[30] しかし、如何なる立派な理論もその限界はあり、構造主義も循環論から完全に脱却できなかった。石毓智（1992a：348）は構造主義の品詞理論を批判し、名詞の分類

においては、先ず「‘不’によって否定できない」という一つの分布標準に基づくが、もし“不桌子”はなぜ言えないのかと問えば、構造主義者はきっと些(いささ)かのためらいもなく「そりゃあ桌子が名詞だからさ」と答えるはずだと述べている。つまるところ、語法研究の目的が単に言語の構造を描写するためであるなら、構造主義は伝統語法に比べて大変優れている。しかしながら、もし我々の目的が言語構造に対して解釈（釈明・説明）もしなければならないとすれば、やはり別の道が必要となる。本稿で気づいた問題も、構造主義では道理的な解釈ができないものなのである。以下に具体的に説明しよう：

形式基準の甲により、品詞 A から二つの下位類 A1 と A2 に分ける。たとえば、適切な個体量詞がつけられるかどうという基準で名詞を可算名詞と不可算名詞に分ける。

形式基準の乙によって、品詞 B を二つの下位類 B1と B2に分ける。たとえば、助詞の“着”をつけられるかどうかという基準で動詞を未完了動詞と完了動詞に分ける。

形式基準の丙によって、品詞 C を二つの下位類 C1C2 に分ける。たとえば直接修飾名詞が限定されるかどうかなどの基準で形容詞を性質形容詞と状態形容詞に分ける。

これは構造主義の品詞分類の方法である。なぜ甲乙丙を選び、それぞれ ABC の三種類を下位類に分ける基準とするのか、その答えはこのような基準によって立てられた下位類が単語の語法分布の状況を十分に映し出せるからである。もし甲乙丙の間に何らかの関係や共通するところがあったらば、偶然に同じだったといえるばかりである。しかしながら、我々の研究は、甲乙丙の間に共通するところは、おそらくたまたま同じだったのではなくて、人間の認知特徴の基礎の上に成立するものであることを見出している。たとえば、「有界」と「非有界」の対立がつまりかかる認知特徴なのである。名詞・動詞・形容詞それぞれが重要な下位類に分かれる形式的基準は皆「有界－非有界」という概念が統括するのであれば、これは品詞分類の形式基準の背後に概念上のあるいは意味上の理由がまだあることを物語っているのである。

「認知語法」が「概念」あるいは意味から品詞分類を探求するのは、伝統語法が行った昔ながらの道筋にまったく戻ってしまうということではなく、「意味」に新しい内容を与えることなのである。[31] ここでいう「意味」は、客観的な意味またはいわゆる「真値条件」に限定されるものではなく、人の認知要素をその中に含めて考えるものである。たとえば、過去の意味理論では、「イス」という語の意味は一セットの客観的な語義要素または真値条件（四本足・背もたれ、座りうる平面がある）によって表現されるのだが、足の一本がなくなったイスもまた人はそれがイスだと「認める」。つまり「イス」

の意味は客観的な基準と主観的な認識が結合したものなのである。同様に、以前は名詞がモノを示し、動詞が動作を表すといっても、「モノ」と“「動作」の意味を確定する方法がなかった。それもまた我々が意味を客観的な基準に限定していたからなのである。「認知語法」では認知より出発して「モノ」及び「動作」の境界を定める試みが既になされている（詳しくは Langacker 1987a,b を参照）。幾つかの新しい認知概念（「有界－非有界」もその中の一つ）の提出は伝統語法の研究の範囲を超え、以前は何の関係もないと思われていた語法現象に関係を見いだし、語法理論の解釈力を強化させたのである。この道筋が果たしてうまくいくものであるかどうか、それはなお実際の検証を待たねばならない。

注

①陆丙甫（1984）はこの組み合わせと次の“今天不谈两个问题”は何れも成立しないのではなく、“今天要谈谈两个问题：X 问题和 Y 问题”のような、自由な統語的な組み合わせではないことを指摘する。[32]

②我々がここで強調するのは、“了 1”、“了 2”の区別ではなく、それらの共通点である。即ち、両者は何れも非有界概念を有界概念に変え得ることができるということである。李兴亚（1989）は実例で“了 1”と“了 2”は取り替えても意味が変わらない場合もあるということを明らかにしており、それは両者が通じ合っているという証である。石毓智（1992b）も同様の観点を持つ。

③「非事象文」の種類はさらに多い。たとえば「授受」“给予”の意味を表す二重目的語構文は、“送他衣料「彼に衣服の生地を贈る」/*送学校油画”のように、もし間接目的語が人称代名詞であれば、直接目的語は数量詞を持たなくても良く、ここでの“送他衣料”は問いかけの“你说,我送他什么好呢?”「彼に何を贈ったらいいかな?」を受けてのことばであり、この種の問答文は独立の事象を表さず、独立の事象ではやはり“送（了）他一块衣料”「彼に服の生地を贈る」と述べるべきである。このように陸論文は指摘している。語感上、“送他衣料”は“送学校油画”より確かに自由に見えるが、その原因はさらに探求すべきである。“送他”という動作の有界性が“送学校”より弱いためであると我々は考える。代名詞が個体のモノを指す作用は一般名詞には遠く及ばず、前文を受け継ぐ時、代名詞はよく省略される。たとえば、“你说,我送小王什么好呢?”の問いかけに対して、“送他衣料”あるいは“送衣料”と答えてもよく、“送他”は“送”（非有界）に近づいて

いる。

④近年多くの論文で漢語の文が「自足する」条件について討論されており、何れもこの二つの文の区分について言及している。贺阳（1994）、孔令达（1994）、黄南松（1994）を参照。[33]

⑤陆丙甫（1984）も「二つの数の情報は重複し衝突する」ことに言及しているが、今まだその原因をうまく解釈する方法がないと述べている。

⑥形容詞は“量幅”“量点”の対立を有するということを最初に取り上げたのは石毓智（1991）である。[34]

⑦“了”と同じである。状態形容詞の後ろの“的”（朱德熙氏（1961）の“的 2”）と性質形容詞の後ろの“的”（朱德熙氏（1961）の“的 3”）の区別を強調するのではなく、両者の共通点を強調する。注②を参照。

⑧主語と述語は有界と非有界の上に互いに影響する、Carlson（1981）は英語を例に納得できる論述を持つ。主語名詞は有界か非有界により述語動詞が有界か非有界により理解されるのかに影響しうる。たとえば“A guest arrived”では、動詞“arrived”は非持続的であるが、“water came in”では、動詞“came in”は持続的に理解される。即ち arrive と come in は同一類動詞に属しているけれども、水は絶えず（all the time）湧きあがる。[35]

＜再び「有界」と「非有界」を語る＞

要約：「有界」と「非有界」の対立は一定の「認知領域」あるいは一定の言語レベルから相対的に述べられるものであると本稿は強調する。[36] はっきりした問題は、「有界」と「非有界」の対立は主に主観的な「捉え方」と概念上の対立であり、客観的、物理的な対立ではない。[37] 異なる観察視点が異なる「捉え方」を生み出しうる。補充された内容は、「有界/非有界の結びつけ原則」が名詞と動詞の間だけでなく、名詞と形容詞の間にも、動詞と形容詞の間にも作用するというものである。本稿はまた一歩進んで研究すべき問題を指摘する。

拙稿『「有界」と「非有界」』（『中国語文』1995 年第 5 期掲載）を発表後、絶えず質問が寄せられ、それらの問題を明らかにするよう求められていた。このほど、新たにい

くつかの関連文献に目を通したので、読者から出された問題に焦点をしぼり、考えを整理し直すことで、考えが及ばず、明確に説明されてない点について、ここで一歩踏み込んで説明を加えていく。言及してはいるが強調しなかったものについては、強調を加えるものである。本稿にはさらに、深く掘り下げて研究されるべきいくつかの問題も提起している。理解しやすくするため、前回の内容がかなり重複せざるを得ないものとなっている。

0. モノの有界と非有界

強調すべき点は、「有界」と「非有界」とはまず概念上の区分であり、概念の確立と区分は一定の「認知領域」(cognitive domain) 内で行わねばならないということである。一定の認知領域を離れると、我々は名詞“苹果”とはいったい「有界」なのか、それとも「非有界」を表すモノなのか判別できない。いわゆる「認知領域」とは、人がある概念を確立させる際に、依存しなければならない包括概念のかなり広い概念領域を指すのである。たとえば、「弧」の認知領域は「円」であり、「斜辺」の認知領域は「直角三角形」である。

円の概念がなければ弧の概念もなく、直角三角形の概念がなければ斜辺の概念もない。同じモノは、認知領域の違いから、イメージに変化が発生することとなり、異なる概念が形成される。もし「弧」の直接の認知領域が円ではなく、二次元空間だとするなら、それは「弧」ではなく、「弧形曲線」なのである。(Langacker,1987/1991：vol.1：184)

「可算、不可算」という認知域内において、我々は英語の apple が有界のモノを代表し、water が非有界のモノを代表するものとしている。apple は可算名詞であり、語の前に不定冠詞 (an apple) と数詞 (one apple, every apple) をもつことができ，複数形式 (apples) もある。一方、water は不可算名詞であり、通常は不定冠詞 (* a water) と数詞 (*one water, * every water) をつけることはできず、複数形式 (*waters) もない。漢語には「数」の区分はないものの、量詞による類別はある。“苹果”は可算名

詞であり、“书”、“笔”、“马”と同様に専用の個体量詞をもつ。例：“一个苹果、一本书、一盏灯、一支笔、一匹马”。一方、水は不可算名詞であり、“面粉、氧气、油、药”と同じく専用の個体量詞をもたず、臨時量詞（一“桶”水、一“袋”面粉）、度量詞（一“斤”油、一“立升”氧气）あるいは不定量詞（一“点儿”水、一“些”药）を用いられるだけである。

「個体と集合」の認知領域内では、英語 an apple は apples（数量詞なし）に変わる。たとえば、She likes *apples*「彼女はリンゴが好きだ」 のようになるか, あるいは apple に変わる。また、たとえば There is *apple* all over the ground（满地都是苹果）「地面はリンゴでいっぱいだ」のように、専ら個体を指していたものから一般に集合体を指すものに変わることで、そのモノは有界から非有界へと変わる（Talmy2000,vol.1：52）。漢語の名詞には単数複数の区別はないが、裸の名詞、特に動詞の目的語となる裸の名詞、たとえば、“吃苹果”での“苹果”、“来车”での“车”、“喝水”での“水”、などは何れも一般的な総称の類別名詞であるので、非有界のモノを表わすものである。一方、“吃三个苹果、来一辆车、喝一杯水”などの目的語の名詞は数量語句を伴い、専ら個体を指すので、有界のモノを表している。

これはつまり、「可算と不可算」という認知領域内において、“苹果”は“水”に対しては有界のモノを表しているが、「個体と集合」の認知領域内においての“苹果”は、“三个苹果”に対しては、非有界のモノを表すことになる。認知領域が異なるので、二通りの判断は矛盾するものではない。

モノの「可算性」と「個体性」には関連があり、また違いもある。個体のモノは必ず可算的なものである、しかし可算的なモノは必ずしも個体の形態を呈しているものでもない。

モノの「可算性」と「個体性」は何れもモノ固有の客観的属性と関係があるが、最終的には人の客観的なモノに対する認識が基準となる。同一のモノに対し、異なる認識を持つこともできる。たとえば:

I'd like *a cake*.
I'd like *some cake*.

英語 a cake と some cake の相違は、同一のモノである“糕饼”「軽食と菓子類」に対

して可算と不可算という異なる主観的認識が表現されたものである。同様に、“消息”「情報」という抽象のモノは、英語の information を用いると不可算とみなされ、a message では可算に見なされる。後者は漢語の“消息”という単語がもつ専用の量詞“条”（一条消息）と比較対照することができる。

1. 動作の“有界”と“非有界”

同様に強調したいのは、動作の「有界」と「非有界」の区分もまた必ずある一定の「認知領域」内において、行われねばならないことである。一定の認知領域を離れると我々は動詞“吃”は結局有界動作を表すものか、それとも非有界動作を表すものか、判定できないのである。「動作が持続するかどうか」という認知領域内においては、英語動詞の eat は有界動作を表し、resemble は非有界動作（状態）を表す。resemble（像）と like（喜欠）、belong to（属于）、need（需要）は同じように「未完了動詞」に属し、単純現在時制があり、進行形を持たない。

Harry resembles his father.	*Harry is resembling his father.
Paul likes swimming.	*Paul is liking swimming.

一方、eat（吃）と jump（跳）、arrive（来到）、hit（击中）は同じように「完了動詞」に属し、進行形があり、単純な現在時制はない。

*John eats.	John is eating.
*Tom jumps.	Tom is jumping.

そのほかに、完了動詞は重複進行を表す副詞 again and again で修飾できるが、未完了動詞はできない。たとえば：

John ate the fish again and again.	*Tom resembled his father again and again.

中国語の動詞にも類似の区分がある。「完了動詞」は着を付けることができ、重ね型がある。たとえば、“吃着、吃吃、跳着、跳跳”であり、未完了動詞は一般に着を付け

ることはできず、また、重ね型もない。たとえば“*爱着、*爱爱、*姓着、*姓姓”である。

英語の未完了動詞は進行形を持つことができず、中国語の未完了動詞は動作の持続を表す着を加えることはできない。これは何れも未完了動詞が表す動作が時間上非有界であり、それ自体がすでに持続、あるいは進行の意味を持ち、さらに進行形あるいは着を加えると余剰になるからである。これが“同性排斥”「同じ性質のものは排除される」である。英語の完了動詞は again and again で修飾でき、中国語の完了動詞は重ね型を持つことができる。これらはみなこの種の動詞は動作が時間上有界であることを表し、「再現可能性」を持つからである。これを“同性相容”「同じ性質のものは受け入れられる」という。

「動作に終了点があるかどうか」という認知領域において、単純動詞“吃、盛、打、飞”などが表す動作は時間上に内在終了点を持たない。このため、非有界動作を表す。複雑な動詞フレーズ“吃了”、“盛碗里”、“打破”、“飞进来”などが表す動作は内在終了点を持つ。たとえば盛り付けるものはお碗に入り、“盛碗里”の動作は終了する。このため、これらの動作は有界動作を表す。同様に、英語では不適格とされる*John eats. を John has eaten. に改めると適格になるのも、動詞フレーズ have eaten. が表す動作が内在終了点を持つので、有界動作を表すからである。

これはすなわち「動作が持続するかどうか」という認知領域内において、動詞“吃”は“爱”に対し、有界動作といえる。「動作に終了点があるかどうか」という認知領域において“吃”は“吃了”あるいは“吃一碗”に対し、非有界動作といえる。二つの判断の認知領域は異なるので、矛盾は生じない。

動作の「完了」と「終了」は関連があり、また区別がある。内在終了点を持つ動作は必ず完了的であるが、完了動作は必ずしも内在終了点を持つわけでもない。動作の「完了」と「終了」もまた動作固有の客観的な属性と関係があるが、最終的には人の客観的動作に対する認識を基準とする。たとえば“怀孕”「妊娠する」は英語では一般に持続（未完了）状態とみなされ、be pregnant という。もし、非持続（完了）過程とみなすなら、be getting pregnant ということもできる。（中国語の“她怀着孕呢”と“她快怀上孕了”と比較できる）

2.「動作」と「事象」

漢語では形態素に「自由」と「拘束」の区分があるだけでなく、統語構造にも「自由」と「拘束」の区分がある。[38]

*他吃了苹果。(他吃了苹果又吃梨)
他吃了苹果了。
他吃了一个苹果。

最初の構造は「拘束」的なものであり、後の二つは「自由」なものである。構造の自由/拘束と形態素のそれとは異なるレベルにある。構造の「自由」と「拘束」の対立は、実際には「有界」と「非有界」の対立であり、自由な構造は「有界」の完全なる事象(event)を表し、拘束構造は「非有界」の不完全な事象(event)を表している。“他吃了苹果”が成立しないのは、有界の動作である“吃了”と非有界のモノである“苹果”とが結ばれないからである。“吃了”という動作は内在終了点を持っているが、それは、後ろに有界のモノである“一个苹果”が来るか、あるいは文末にもう一度“了”を加えねばならない。そうすることで、その終了点の落ち着き先ができ、実際の終了点となり、構造全体が一つの完全なる事象を表現することができるのである。

強調しなければならないのは、「動作」という認知領域、あるいはフレーズというレベルにおいては、“吃苹果”と比べた場合、“吃了苹果”は有界の動作を表すが、「事象」という認知領域、あるいは文というレベルにおいては、“吃了苹果了”あるいは“吃了一个苹果”と比べた場合、“吃了苹果”は、非有界の事象を表す。これもまた二つの異なる認知領域において、同じ“吃了苹果”に対して異なる判断を行うということであり、決して矛盾しているわけではない。

「動作」と「事象」は関連もあるし区別もある。事象は必ず動作を含むが、動作は必ず事象となるとは限らない。

3. モノと動作の有界/非有界における対応と結びつけ

まず対応について述べる。モノの有界非有界と動作のそれとは相通じるものであり、両者には明らかな対応関係が存在している。この対応関係は Langacker (1987) で既に論証されている。たとえば英語の動詞の場合、有界動作を表すのであれば、名詞化さ

れた場合、不定冠詞 a をつけることができるが、非有界動作を表す場合は、名詞化された場合、不定冠詞をつけることはできない。

a. Mary capsized the boat. → There was a capsizing of the boat by Mary.
b. John pushed the cart for hours.
→ For hours there was (*a) pushing of the cart by John.

漢語では動詞も名詞と同様、前に数詞“一”を加えることで、もともと表していた非有界動作を有界動作に変えることができる。名詞“水”や“药”は非有界のモノを表すが、“一桶水”や“一点儿药”は有界に変わる。同様に、動詞“烧”、“坐”、“散”が表す動詞は非有界であるが、“一”を加えればやはり有界に変わる。たとえば以下の例の「“一”＋動詞」は短い動作の「完了あるいは出現」を表す（詹開第 1987）が、これはつまり有界動作を表している。

把他那份儿神像一烧！愣说他“上天言好事”去啦。
这位老道进到屋里，往那这么一坐。
每人三十个羊肉冬瓜馅的煮饺子，吃完了一散。

次に「結びつけ」について述べる。漢語では、ある統語的な組み合わせは数量詞がなければ成立しない。「成立しない」というのは、自由な形式では存在できず、拘束性の形式でしかあり得ないということを主に指す。たとえば：

*盛碗里鱼
盛碗里两条鱼
*送来戏票（送来戏票的人在哪里？）
送来两张戏票
*飞进来苍蝇（飞进来苍蝇就打）
飞进来一只苍蝇
*吃了苹果（吃了苹果又吃梨）
吃了一个苹果

*捂了孩子痱子
捂了孩子一身痱子

「動作に終了点があるかないか」という認知領域では、単純な動詞“盛”、“捂”、“送”、“飞”、“吃”などが表す動作は非有界であるが、“盛碗里”、“送来”、“吃了”、“捂了孩子”といった複雑な動詞フレーズが表す動作は有界である。「個体と集合」という認知領域では、裸の名詞“鱼”、“痱子”、“戏票”、“苍蝇”、“苹果”は非有界のモノを表し、“两条鱼”、“两张戏票”、“一只苍蝇”、“一个苹果”、“一身痱子”はいずれも有界のモノを表す。

このことから、統語構造に対する数量詞の制約は実は概念における「有界/非有界」の対立の語法における反映であることが理解できる。“盛碗里鱼”、“打破玻璃”、“飞进来苍蝇”、“吃了苹果”などの統語的な組み合わせが成立しない、あるいは不自由であるのは、その中の有界動作と後に続く非有界のモノの結びつけが正しくないからなのである。

一方、ある統語的な組み合わせは数量詞を排除する。たとえば：

山上架着炮[①]
*山上架着两门炮
他正在吃着饭
*他正吃着三碗饭

“架着”、“吃着”は非有界動作を表し、“两门炮”、“三碗饭”は有界のモノを表す。*をつけた二つの文が成立しないのは明らかにその中の非有界動作と後に続く有界のモノの「結びつけ」が正しくないからである。

拙稿（1995）が得た「有界/非有界結びつけの原則」とは、動作が有界であれば、その支配を受けるモノもまた有界であり、動作が非有界であれば、その支配を受けるモノもまた非有界である、というものである。[②]

4. 結びつけ原則に対する更なる説明

上述した「結びつけ説」は、いくらか問題を引き起こし、些か誤解が存在するので、

明らかにする必要がある。英語の例を見てみる：

I walked across the street slowly.「私は通りを向かい側へゆっくりと歩いた」
I walked along the shore slowly.「私は海岸に沿ってゆっくり歩いた」
I ate up the popcorn in 10 minutes.「私は 10 分でポップコーンを食べ(尽くし)た」
I ate popcorn for 10 minutes.「私は 10 分ポップコーンを食べた」

一定の認知領域内で、動作 walk across「向かい側に行く」と eat up「食べ尽くす」は有界であり、関係するモノ the street「その通り」と the popcorn「そのポップコーン」も有界である。動作 walk along「沿って歩く」と eat「食べる」は非有界であり、関係するモノ the shore「海岸」と popcorn「ポップコーン」も非有界である。このような解釈は、「結びつけ説」に符合する。しかし、「10 分間食べる」（英語で eat for 10 minutes）は、「食べる」（eat）に対して言うならば、有界の動作であるが、最後の一文の、この有界の動作に関係するモノ popcorn「ポップコーン」は、逆に非有界なのである。その他、walk along は非有界であるが、関係しているモノは逆に有界なのである。たとえば：

I walked along the street slowly.「私は通り沿いにゆっくり歩いた」

動作とモノの有界/非有界の結びつけ関係を維持するために、Talmy（2000vol：55）は、「境界符合の原則」（Principle of Boundary Coincidence）を提出して、動作が有界かそれとも非有界かを判定する拠り所とした。動作の有界と非有界を区分するには動作の支配を受けるモノを考えに入れる必要があり、動作の境界は必ず動作の支配を受けるモノの境界と「重なり合わ」なければ、動作は有界ではないと Talmy は述べている。たとえば：

I walked through the tunnel *in* 10 minutes.
「私はトンネルを 10 分で歩いて通り抜けた」
I walked through the tunnel *for* 10 minutes.
「私はトンネルを 10 分間歩いて通った」

動作「10 分歩いた」は有界だけれども、しかしもしこの動作と動作の支配を受けるモノ「トンネル」を関係づけると、上文は運動経路がちょうどトンネルの長さと重なり合うが、下文は重なり合わない（運動経路はトンネルの長さよりも短いはずだ）。

| トンネルの長さ |
→
10 分間の行程

| . . トンネルの長さ . . . |
→
10 分間の行程

「境界符合の原則」によれば、上文の動作は「10 分で通り抜けた」（*in* 10 minutes）が有界の動作に、下文の動作は「10 分間通った」（*for* 10 minutes）が非有界の動作に判定できる。

「認知意味論」の学術用語を用いて言うならば、「10 分で通り抜けた」は客観的には有界の動作であるが、しかしもしこの動作が、その支配する有界のモノに全く影響しないならば、それは非有界動作「に捉え」（construed as）られる。[③] どうしてこのような「捉え方」がありえるのか？なぜならば、人々の思考の有界動作は、いつも一つの有界のモノと関連し、動作の進展に従い、モノの影響を受ける範囲が増加するので、動作が終わる時にモノはすでに完全な影響を受けている。たとえば：、

The log burned up in 10 minutes. 「丸太は 10 分で燃え尽きた」
I ate the popcprn up in 10 minutes.「私は 10 分でポップコーンを食べ尽くした」
Water filed the tub in 10 minutes.「水は 10 分で浴槽いっぱいになった」
I dressed in 10 minutes. 「私は 10 分で服を着た」
I walked through a portion of the tunnel in 10 minutes.
「私は 10 分でトンネルの一部を（歩いて）通った」

この種の捉え方は英語ではすでに「文法化」され、述語部分に前置詞 in を用い for と区別することで表現している。漢語も相応する語法表現があるが、ただ表現方式が同じではない：

我 10 分钟穿过隧道。　「私は 10 分でトンネルを通り抜けた」
隧道我穿行 10 分钟。　「トンネルを私は 10 分間進んだ」

動補構造“穿过”は、有界の動作を表し、単純動詞“穿行”は非有界動作を表している。“穿过隧道”と“穿行隧道”は英語では何れも walk through である。“穿行 10 分钟”の動作に至っては、時間数量詞“10 分钟”が述語の前に置かれた時、有界動作に捉えられ、述語の後に置かれた時、非有界動作に捉えられる。してみると、漢語における区別の手段は、語彙（穿行/穿过）と語順であり、前置詞ではない。さらにたとえば：

*我 10 分钟穿行隧道
我 10 分钟穿行隧道,10 分钟吃爆米花。
「私は 10 分でトンネルを通り抜け、10 分でポップコーンを食べた」

上文が単独では成立しない（自由形式ではない）原因は“10 分钟穿行”の語順が“穿行 10 分钟”に対して有界動詞を表わし、“穿行隧道”は“穿过隧道”に比べると非有界動作を表わしているので、両者は結びつかないのである。下文は、対句として成立していると言うことができ、「“10 分钟穿行隧道,10 分钟吃爆米花”は規定時間内に規定項目が完成した」と理解することができる。この対句の下で、通常は非有界動作の“穿行”と“吃”が“10 分钟”を前置する語順で譲歩し、有界の“穿过”と“吃完”に捉えられる。

同様の道理で、動作が非有界動作であるとき、動作の支配を受ける客観上の有界のモノも非有界のモノに捉えられる。たとえば、英語の I walked along the street for 10 minutes と I walked through the tunnel for 10 minutes の両文の the street と the tunnel である。同じモノが、「視点」（perspective）が原因で異なる次元（点、幅、線）で捉えられる。[39] Talmy（2000vol.1：61）の例は以下の通りである：

She climbed up *the fire ladder* in five minutes.（幅、有界）
「彼女は避難梯子を 5 分で登った」
Moving along on the training course, she climbed the *fire ladder* at exactly midday.（点）

「トレーニング中だったので、彼女は正午きっかりに避難梯子を上った」
She kept climbing higher and higher up the *fire ladder*（線、非有界）
「彼女は避難梯子を次第に高く登り続けた」

梯子は当然二つの端を持つ有界モノであるが、しかし近くで見ると幅となり、遠くで見ると点となり、特に近くで見ると線となる。これは「遠視点/近視点」（distal perspective）作用の結果であり、ちょうど写真を撮るときにレンズ鏡を遠くに推すのと、近くに引くのとでは異なる効果があるようなものである。特に近くで見る時は、観察者の注意はただ梯子の中間部分に集中し、梯子は非有界のモノに捉えられる。ただ、この捉え方の「文法化」は、名詞 the fire ladder 上には表れず、述語部分に表れる（持続アスペクト、keep climbing）。同様に、漢語の“10 分钟吃完爆米花”の“爆米花”は、裸の名詞だけれども、有界の“一堆爆米花”に捉えられねばならない。当然、名詞に表れる状況もある。たとえば、eat popcorn と eat up the popcorn の区別である。有界/非有界の「捉え方」については、どのような状況下で既に文法化し、どのような状況下で文法化していないということについては、従うべき法則があるのかどうか、これはさらに研究せねばならない問題である。

動作とモノの間の「有界/非有界の結びつけ原則」は、改めて下記の如く表すべきである：

動作が有界であれば、動作の支配を受けるモノはそれに応じて有界に捉えられ、動作が非有界で、動作の支配を受けるモノはそれに応じて非有界に捉えられる。その逆もまた然りである。

我々が強調してはっきりさせておくことは、「有界」と「非有界」の対立は、主観的な捉え方と概念上の対立であり、客観的、物理上の対立ではないということである。主観的な捉え方は当然客観的なモノを拠り所とすべきであり、大多数の状況では両者は一致しているが、しかし主観的な捉え方は必ず客観事実と一致するというのではなく、両者が矛盾を生じた時に、主観的な捉え方を基準とするのである。

5. 性状の有界と非有界

拙稿（1995）で漢語の事例を用いて論証したのは、モノ及び動作という二つの認知領域にはそれぞれに対応する有界/非有界の対立があるばかりでなく、性質状態という認知領域にもそれに対応する有界・非有界の対立があることだった。人は事物や動作を五感で感知し認識すると同時にまたそれらの性質や状態（“性状”と略称）を感知し認識する。性状の程度あるいは量において、「有界」「非有界」の区分があり、その区分は漢語形容詞の形態変化に現れる。漢語の形容詞は明らかに二つの下位類に分かれる。一つは“白”、“慢”、“干净”といった単純な形態の性質形容詞である。もう一つは“雪白”、“慢腾腾”、“干干净净”という複雑な形態の状態形容詞である。例を挙げていえば、“白”という色はモノの性状の一つであり、“白”にはその程度にそれぞれの差がある。“雪白”「真白」が白なら、“灰白”「青白い」も白なのである。“白”という語はそれぞれの程度の白を概括するものであり、程度上限定がないという点からすると、“白”の表す性状は非有界なのである。相反して、“雪白”、“煞白”「青白い」などとなるとある一定の「白さ」を示すことになる。程度上の制限を受けるということから、それらが表示する性状は有界なのである。同様に、ある人が歩くのが"走路慢"「歩くのが遅い」と我々が感じるとき、この“慢”は歩くという動作の状態であるのだが、“慢”は“快”に相対する表現であり、そこには各種の異なる“慢”の状態があって、“慢”が表す程度には限定がないため、非有界である。 相反して、“慢慢地”、“慢腾腾”、“非常慢”などでは、限定のある「遅さ」を示すものなので、有界である。この二種の形容詞は統語的な表現に一連の違いがあり、朱徳熙（1956）が詳細に論じている。[40]

性状の有界/非有界の対立は、別の言語の形容詞の中にも現れているのだが、形態の総体において漢語よりも発達した言語では、この点は返って漢語のようには明確には示されていない。

性状とモノにおける有界・非有界の組み合わせについては拙稿（1995）で既に以下のように論証している。

白	衣服	*白	一件衣服	*雪白	衣服	雪白	一件衣服
糊涂	人	*糊涂	一个人	*稀里糊涂	人	稀里糊涂	一个人
干净	鞋	*干净	一双鞋	*干干净净	鞋	干干净净	一双鞋

好　　车　　*好　　一辆车　　*很好　　车　　很好　　一辆车
（非）（非）　（非）　（有）　　（有）　　（非）　（有）　　（有）

左側の“白一件衣服”等が成立しないのは、非有界形容詞（たとえば“白”のように）が有界名詞“一件衣服”と結びつかないからであり、右側の“雪白衣服”等が成立しないのは、有界形容詞（たとえば“雪白”）が非有界名詞（たとえば“衣服”）と結びつかないからである。

以上は形容詞が連体修飾語（定語）となる場合である。形容詞が述語となるときも主語の名詞との間にやはり有界/非有界による相互の影響があるはずである。以下の例は同様に裸の普通名詞“紙”が主語となるが、性質形容詞“薄”が述語となるとき、“紙”は一般的なものを指す非有界名詞に捉えられるが、状態形容詞“薄薄的”が述語になるときには、“紙”は具体的な個体を指す有界名詞として捉えられねばならない：

纸薄,（不比玻璃,）一捅就破。
（那层）纸薄薄的,　一捅就破。

同様に状態形容詞“干干净净”が述語となるときには、主語の名詞“衣服”は有界の個体名詞として捉えられねばならないが、しかし連体修飾語（定語）となるときには、その修飾を受ける名詞“衣服”は非有界で一般的な類別名称だと捉えられる：

（这件）衣服干干净净的, 穿着舒服。
「（この）服は清潔だから、着て気持ちがよい」
干干净净的衣服穿着舒服。
「清潔な衣服というものは，着て気持ちがよい」

「有界/非有界の結びつけ原則」に照らせば、このことは、状態形容詞“干干净净”が連体修飾語（定語）となるときには非有界の性状を指すものとして捉えられるのに、述語となるときにはそのようには捉えられない、と言うに等しい。それはなぜだろうか。それは、状態形容詞の主な統語機能の能力が述語になることであり、連体修飾語となるのは主に性質形容詞の機能となることによる（沈家煊 1997 を参照）。[41] 有界/非有界の

捉え方が、言葉の引き受ける統語要素とどのような関係があるのかについては、これもまたさらに研究が待たれる問題である。

6. 動作と性状の有界/非有界における結びつけ

ここは本稿が補足する内容である。モノには性状があり、動作にも性状がある。動作の性状は主に動作の手段や結果と関係する。先ず動作の手段から見てみよう：

高	举	*高	举起	*高	一举	*高高举		高高	举起/	高高	一举
轻	放	*轻	放下	*轻	一方	*轻轻	放	轻轻	放下/	轻轻	一方
粗	看	*粗	看完	*粗	一看	*粗粗	看	粗粗	看完/	粗粗	一看
紧	握	*紧	握住	*紧	一握	*紧紧	握	紧紧	握住/	紧紧	一握
(非)	(非)	(非)	(有)	(非)	(有)	(有)	(非)	(有)	(有)	(有)	(有)

“举”、“放”、“看”、“握”などの裸の動詞は非有界の動作を表し、“举起”、“放下”、“看完”、“握住”などの動詞＋結果補語及び動詞＋方向補語は有界の動作を表す。非有界の動作は、“高”、“轻”、“粗”、“紧”などの非有界の性状と結びつき、有界の動作は、“高高”、“轻轻”、“粗粗”、“紧紧”などの有界の性状と結びつく。“高举起”、“高高举”などは成立しない（自由形式ではない）が、その原因は音節の組み合わせによる韻律（prosody）と関係があるのだろうか。[42]「1＋2」と「2＋1」という三音節の組み合わせの連用修飾構造が韻律の組み合わせとして好ましいものではないからだろうか。そうは思えない。なぜなら同様に「1＋2」の形式である“白担心”「余計な心配をする」、“老打架”「しょっちゅうけんかをする」、“穷折腾”「空騒ぎをする」、“乱打听”「やたらに尋ねる」、“干着急”「むやみに慌てる」などはみな可能だからである。同様に「2＋1」の形式の“使劲举”「力を入れて挙げる」、“小心放”「注意して置く」、“仔细看”「詳細に見る」もまた言えるからである。

“养一段”と“看一遍”は明らかに有界の動作を表すが、“静养一段”や“粗看一遍”といえるのはなぜだろう。実は“静”は“养一段”を修飾するのではなく、“粗”も“看一遍”を修飾するのではなく、“养静”および“粗看”はもはやきつく固められた二音節複合語となっているのである（朱德熙 1956）：

静养/ 一段 「一時期静養する」　　粗看/ 一遍 「ざっと読む」

*静/ 养一段　　*粗/ 看一遍

もし“高举起”がいえると考えるなら（“高举起革命的大旗”「革命の大旗を高く掲げる」)、やはり“高举/起”と分析せねばならず、“高/举起”の分析ではないのである。“慢慢走”、“慢慢说”は例外のようにみえるが、実はそうではない。“慢慢走”、“慢慢说”という言い方は、命令文（願望文の動作はまだ起こっていない）であるか、あるいは不自由なものであり、対にしなければ言えないのである：“他慢慢说，我慢慢记”。一つの完全な事象を述べるときには、“他慢慢地走过来”および“他慢慢地说完”と言う言い方にしなければならない。

もう一度動作の結果状態についてみてみよう：

把嘴张得大大的　*把嘴张大大的　*把嘴张的大　把嘴张大
「口を大きく開ける」
把东西抢得精光　*把东西抢精光　*把东西抢得光　把东西抢光
「物を奪い尽くす」
把包裹抱得紧紧的　*把包裹抱紧紧的　*把包裹抱得紧　把包裹抱紧
「小包をしっかり抱く」

“张”、“抢”、“抱”などの単純動詞は非有界を表し、“大”、“光”、“紧”などの性質形容詞と結びつくだけだが、“张得”、“抢得”、“抱得”などの複雑な動補構造は有界の動作を表し、“大大的”、“精光”、“紧紧的”などの状態形容詞と結びつけられるだけである。

「“V 得”＋性質形容詞」は絶対言わないというわけではなく、対にした時に言えるだけであるので、自由形式ではない：

攀得高，跌得重。　「高く上げられれば　こけるのも大きい」
站得高，看得远。　「高く登るほど　遠くが見える」

もし動詞の前に“早已”、“已经”、“马上”など動作が有界であることを強調する語句の修飾があるなら、性質形容詞はいっそう現れにくくなる（朱德熙 1982：9.8.4)：：

已经走得远远的　　*已经走得远
「すでに遠く行ってしまった」
早就想得很透彻　　*早就想得透彻
「とっくにちゃんと考えてある」
马上忘得干干净净　　*马上忘得干净
「すぐにけろりと忘れてしまった」

“静养一段”を“静养/一段”に分析し、“粗看一遍”を“粗看/一遍”と分析すること、それは間違いなく韻律構造と関係するのである（冯胜利 1997）。[43] 動作と性状の有界/非有界の結びつけが韻律構造とどんな関係を持つのか、これもまた研究されるべき問題である。

7.“的”と“了”の対応関係

*白一件衣服　　白的一件
*雪白衣服　　雪白的衣服

“*白一件衣服”や“*雪白衣服”とはいえないが、“的”を加え、“白的一件”（たとえば“这儿有两件衣服,我要白的一件”「ここに 2 着の服があり、私は白い方がほしい」）や“雪白的衣服”とすると、何れも可能になるが、その理由はどこにあるのか。それは“的”の作用にあるのである。陸丙甫氏は意味の視点から連体修飾語と中心語の修飾構造を貼り付け形式の“小牛”と組み合わせ形式の“小的牛”に区分した時に、“小牛”は呼称性、つまり「牛の子供」の呼び方で、実際に一般的あるいはよく使われる言い方であるが、“小的牛”は呼称性を持たず、たぶん一頭の大人の牛で、体格がかなり小さいものを指しており、具体的なものを指すあるいはそれだけを呼ぶ言い方でもある、と考えた。そこで一本の大きな幼樹は“大的树”「大きな木」であっても“大树”「成長した木」ではない。この意味からすると、“的”の作用は非有界の集合のモノ概念を有界の個体のモノ概念に変えられるものということになる。“的”と数量詞がともに非有界を有界に変える機能を持つので、“*雪白衣服”が有界のモノを示そうとすれば二つの方法がある。一つは数量詞を加え、“雪白一件衣服”に変えてしまうこと、 もう一つは

“的”を加え、“雪白的衣服と変えてしまうことである。もし“*白一件（衣服）が有界のモノを示し得るようにするならば、同様に“的”を加え、“白的一件”と変えればよい。

注意すべきことは、動詞の後の“了”は、“买票”（非有界）や“卖了票”（有界）のように非有界の動作を有界に変えられるばかりでなく、その支配されたモノも非有界から有界へと変えられるということである。これは名詞の前に数量詞を加える作用と同様である。たとえば：

*小张弄脏衣服　　小张弄脏了衣服　　小张弄脏一件衣服
「張さんは服を汚した」
*礼堂响起掌声　　礼堂响起了掌声　　礼堂响起一阵掌声
「講堂には拍手が響いた」

左の二つの文が不成立なのは、有界動作を表す“弄脏、响起”と非有界のモノの“衣服、掌声”（裸の類別名詞）が結びつかないからである。これに“了”を加えると、“衣服、掌声”は有界の具体的なものを指すものだと捉えられる。たとえば、“小张弄脏了衣服”の“衣服”は、ある一着のあるいはある数着の衣服と理解するべきで、衣服一般を指すのではないので、文は成立するのである。

有界の状態形容詞は後ろに数量名詞がつけば、形容詞の後ろの“的”はあってもなくてもよい。同様に、有界の動詞フレーズは後ろに数量名詞がつくときには、動詞の後ろの“了”はあってもなくてもよい。

雪白（的）一件衣服　　「真っ白な一着の服」
别弄脏（了）一件衣服　「服を汚すな」

“的”と“了”の機能上の対応関係、および“的/了”と数量詞の機能の対応についてもまたさらに研究されるべき問題である。

注

①ここでは“山上正在架炮”の動態行為を表し、“山上有炮”の静態存在を表さない。

②動詞の重ね型は例外であるようだ：

我星期天在家洗洗衣服「私は日曜日に家でちょっと洗濯する」

他星期天找我来说说话「彼は日曜日にちょっと雑談するために私を訪ねる」

“洗洗”「ちょっと洗う」の様な動詞の重ね型は「慣用」動作を表す。即ち非有界動作“洗（衣服）”「（服を）洗う」の「反復行為」を表すので、例外ではない。“说说话”「ちょっと雑談する」、“点点头”「軽くうなずく」の“说说”、“点点”は逆に動作の量が限られるので、有界動作を表すが、“说话”と“点头”の概念は全体の概念に見なすことができる。たとえば英語の chat と nod は「動作＋モノ」に分析する必要はない

③「捉え方」は既に「認知意味論」の重要な術語になり、人の自らの視点と注意の強さに基づき一定の領域内での客観事物と状況に対する認識と解釈を指す。Langacker（1987/1991vol.1：128）と Crystal（1997）の Cognitive Semantics 項を参照。

訳注

(1) 全ての名詞は「モノ」を指示する。モノとはある領域における「区域」のことである。名詞は全て何らかの区域を指し示している。この区域内に何らかの境界が設定されている時、「有界的」（bounded）な区域を表す。具体的には可算名詞である。何らかの境界が設定されていない時、「非有界的」（unbounded）な区域を表す。具体的には集合名詞である。全ての動詞はプロセスを表し、このプロセスは、完了プロセスと未完了プロセスとに分かれ、時間領域においては、完了プロセスは変化の開始点と終了点が意味スコープ内部に存在し、有界的であるが、未完了プロセスは均質な状態が、開始点や終了点などの区切りがなく、連続しており非有界的である（辻幸夫 2002『認知言語学キーワード事典』研究社：246）。なお、中国語学では“无界”を通常「無界」と訳すが、本稿では、日本言語学会の学術用語集に従い「非有界」という訳語を用いた。

(2) “事物”「モノ」を指示するのが名詞であり、名詞というカテゴリーのプロトタイプである。名詞の定義の基盤となるモノとは、「ある領域における区域」であると定義されている（Langacker1987b：189）。“動作”「動作」（「関係」）は動詞というカテゴリーの原型である。“事物”の日本語訳は「モノ」とした。日本語の「事

物」はモノ、関係などを含む上位概念である（辻幸夫 2002：100）。

(3) 陆俭明 1988「现代汉语中数量词的作用」『语法研究和探索』(四),北京大学出版社。

(4) 結果目的語は動作の結果を表し、四つに分かれる：①積極的な名詞の結果目的語は動作が到達したい目的を表す目的語が表すモノは本来存在せず、動作主がその出現を望み、動作を経て、そのモノが生み出される。たとえば：“写信”“做鞋”など。②消極的な名詞の結果目的語はコントロールできないものである。たとえば：“打了一身伤”。述語動詞は一般に非自主動詞（非意図的な動詞）か自主性の安定しない自主動詞（意図的な動詞）。③状態結果目的語は状態から動作の結果を説明する。たとえば：“走了个对脸”④動量結果目的語は動作から刺激の結果を説明する。たとえば：“吓了一跳”。（马庆株 1992『汉语动词与动词性结构』北京语言学院出版社）

(5) 動作主目的語とは動作の仕手を表す。たとえば：“家里来客人了”、“床上坐着两个人”。（马庆株 1992『汉语动词与动词性结构』北京语言学院出版社）

(6) 漢語の形容詞は性質形容詞、状態形容詞、変化形容詞の三種類に分けられる。性質形容詞は恒常的な状態であり、主に連体修飾語（(定語)“臭豆腐”）を表す。状態形容詞は一時的な状態であり、主に連用修飾語（状語)、(述部（“豆腐臭烘烘的”）を表す。変化形容詞は主に（述部（“豆腐臭了”)、補語を表す。(张国宪 2006『现代汉语形容词功能与认知研究』商务印书馆）

(7) 吕叔湘 1983「怎样学习语法」『吕叔湘语文论及』商务印书馆。石毓智（1992a）『肯定和否定的对称与不对称』台湾学生书局。

(8) 視野にある対象を１つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化（organization）といい、体制化により形成されるまとまり（構造体）を「ゲシュタルト」(gestalt）という（辻幸夫 2002：66)。(資料）中国語研究と認知言語学その１訳注３を参照。

(9) 環境を分節し、相互に関係を持って存在する概念によって環境についてのまとまった知識を作り上げるカテゴリーをカテゴリー化（categorization）といい、１つ１つの概念をカテゴリー（category）という（辻幸夫 2003『認知言語学への招待』大修館書店：93）

(10) 量詞とは単位や回数を表す非自立語である。①モノを数える単位（＝名量詞)、②動作や程度をはかる単位（＝動量詞）がある。名量詞は更に（ｉ）個体や事件を

数える単位。例：“一个人、两张纸”（ⅱ）集体を数える単位。例：“一对夫妇、两群羊”。（ⅲ）度量衡や時間、金銭などの単位。例：“一斤米、两尺布”など。（ⅳ）容器などの臨時の単位。例：“一碗饭、两杯酒”がある。動量詞は更に（ⅰ）回数を数える単位。例：“说一下、去两次”。（ⅱ）行為にあずかる部分を取った単位。例：“看一眼、打两拳”。（ⅲ）動詞そのものを単位としたもの。例：“歇一歇、看了两看”などがある。（中国語学研究会編 1969『中国語学新辞典』光生館：89-90）

(11) 種族・種類全体を表すもの。

(12) 方梅・张伯江 1995「北京话指代词三题」『吕叔湘先生九十华诞纪念文集』商务印书馆

(13) “我跑到学校”に対する「私は走って学校に行った」という日本語訳は正確ではない。漢語は走って学校に行き、そのまま到着したことを表すが、日本語訳は学校に向かったことしか表していないからである。

(14) “我很想家”は内在自然終了点を持たないが、“我跑到学校”は学校に到着したら走るという行為は続かない、つまり内在自然終了点を持つということである。

(15) 開始点と終了点を持つ動詞は完了動詞であり、開始点や終了点などの区切りがないか、開始点しか持たない動詞は未完了動詞である。

(16) 赵元任 1968『汉语口语语法』吕叔湘译 1979,商务印书馆

(17) 吕叔湘 1984「与动词后得与不有关之词序问题」『汉语语法论文集』（增订本）商务印书馆、1987「疑问・否定・肯定」『语文近著』上海教育出版社、张伯江 1991「关于动趋式带宾语的几种语序」『中国语文』第 3 期。

(18) 马庆株 1981「时量宾语和动词的类」、『中国语文』第 2 期、陈平 1988「论现代汉语时间系统的三元结构」、『中国语文』第 6 期、Smith, Carlota S.1991 The Parameter of Aspect. Dordrecht：Kluwer Academic Publishers.

(19) 邓守信 1986「汉语动词的时间结构」『第一届国际汉语教学讨论会论文选北京语言学院出版社』

(20) 形容詞の中で“有点”、“很”、“最”などの程度副詞しか修飾できず、前後に数量詞も付加できず、完了アスペクトの“了”を後ろに置けないものは純粋な連続量詞であり、“不”で否定できるだけである。たとえば、“笼统”「あいまいである」、“平淡”「（事物や文章が）変化に乏しい」、“勉强”「不十分である」など。程度副詞で修飾でき、前後に数量詞を付加でき、助詞の“了”を後ろに置ける形容詞は、

離散量と連続量の両性質を兼ね備えており、“不”でも“没”でも否定できる。たとえば“高”、“长”、“好”など。動詞の最も典型的な量の特徴は離散性であり、前後に自由に数量要素を付加でき、助詞“了”を後ろに置くことができ、各種結果補語を付加できるので、“了”で付加できる。けれども、単独動作の内部発展プロセスから見れば、連続性も備え、“不”で否定できる（石毓智 1992a：35-36）。

(21) 文の時相（phase）構造は文の純命題的意味に内在する時間特性を表す。主に述語動詞の語彙的意味によって表されるが、その他の文成分の語彙的意味も重要な選択及び制約の働きを持つ。その中でも特に顕著なのは目的語と補語の働きである（陈平 1988/山田忠司・伊藤さとみ訳 2000『テンスとアスペクトⅠ』好文出版：123）。

(22) ここでの“书”、“电影”などは具体的な単独のモノを指していないために、動作が及ぶ対象である名詞成分は固定的かつ明確な空間的あるいは時間的な境界を欠いている（陈平 1988/山田忠司・伊藤さとみ訳 2000『テンスとアスペクトⅠ』好文出版：163）

(23) 客観的に存在するモノ、行為、性質、変化、関係、量など、これらを表現する文は「客観文」（“现实句”objective sentence）であり、事実に合わない、仮定の、主観的な幻想の、真実でないモノ、行為、性質など、これらの内容が進んでいることを表す文は主観文（“虚拟句”subjective sentence）である（石毓智 1992a：59）

(24) 张国宪 2006 は形容詞を性質形容詞、状態形容詞、変化形容詞の三種類に分けている。訳注(6)を参照。

(25) 陆丙甫 1988「定语的外延性、内涵性和称谓性及其顺序」『语法研究和探索』（四）北京大学出版社

(26) 朱德熙 1961「说“的”」『中国语文』第 2 期

(27) 张黎 2003「“界变”论－关于现代汉语了及相关现象」『汉语学习』第 1 期：17-23 では、「有界」に関し、“了”は「有界変化」を表すことを主張している。

(28) 朱德熙 1982『语法讲义』商务印书馆

(29) 人は息を吐いたり吸ったりでき、食事をしたり排泄したりできる。このような機能は人の体が一つの「容器」であり、容器であれば内と外の区別があることを明らかにする（秋山・間・甲斐 2009 中国語と認知言語学その 2 文献翻訳資料陸倹明・

沈陽≪漢語和漢語研究十五講≫第 12 講（2）：3）

(30) ネイティブアメリカンの言語を研究していく中で生まれた文法のことである。

(31) 認知文法における概念とは心のうちに一定の出来事が喚起されるようになる状態のことである（辻幸夫 2002：22）。

(32) 陆丙甫 1984「从“要谈谈两个问题”等格式为什么不合格谈起」『中国语文通讯』第 1 期。

(33) 贺阳 1994「汉语完句成分试探」『语言教学与研究』第 4 期、孔令达 1994「影响汉语句子自足的语言形式」『中国语文』第 6 期、黄南松 1994「试论断语自主成句所应具备的若干语法范畴」『中国语文』第 6 期。

(34) 石毓智 1991「现代汉语的肯定性形容词」『中国语文』第 3 期。

(35) Carlson,Lauri1981 Aspect and quantification.*Syntax and Semantics*14,eds.by P.Tedeschi & A. Zaenen,New York：Academic Press,31 - 64.

(36) 認知領域（cognitive domain）とは意味の記述に特に必要なコンテキストのこと。空間、時間、視覚、聴覚、味覚、温度、痛覚、感情、運動感覚など、他の領域に還元することができない領域は基本領域（basic domain）と呼ばれる。このような基本領域を基にして成立する、レベルの高い領域を抽象領域（abstract domain）と呼ぶ。（辻幸夫 2002：192）

(37) 捉え方（または解釈 construal）とは、発話のプロセスにおいて把捉事態（認知過程に置いて概念化の対象となるイメージのこと）を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みのこと（辻幸夫 2002：20）。

(38) 自由形態素とは単独で語になることができるが、拘束形態素は単独で語になることができず、主に接辞となる。（David Crystal1997A Dictionary of Linguistics and Phonetics. Blackwell Publishers Ltd.沈家煊译：229）。

(39) 主体である話し手が状況の解釈においてとる見解・立場のことである（辻幸夫 2002：98）。

(40) 朱德熙 1956「现代汉语形容词研究」『语言研究』第 1 期

(41) 沈家煊 1997「形容词句法功能的标记模式」『中国语文』第 4 期

(42) 語や文を構成する音韻の配列に関する規則のこと。プロソディともいう。

(43) 冯胜利 1997『汉语的音律、词法和句法』北京大学出版社